



... by birth

Studio ***46

目次

- ヒナタノユメ -	1
B. 開 = 命の河の舟 =	
エピソード 1 <前>	5
エピソード 1 <後>	27
エピソード 1 <間>	54
- 堰 -	66

－ヒナタノユメ－

そいつのことを初めてみたとき。
不覚にも、なんて可愛いんだろう、なんて、思ってしまったんだ。



B. 開 = 命の河の舟 =

エピソード1 <前>

「……………」

……ふわあー……。

あくびのような口をぽっかり開けたヒュウガ・D・^{ファイ}φ・Lは、眠気を催したわけではない。

——キレイなヒトだなあ……。

仮にも正体不明の「空白」に悩み、相談に訪れた人間とは思えない呑気な感慨。初めての場所で緊張に張り詰めていたヒュウガに、そのふんわりとした気持ちは得難い癒しパワーを伴っていた。

「——で。一番困ってることについて、もう少し詳しく教えてもらえないかな」

目の前には同年代の、煉瓦に近い^{すみれ}董色の真っ直ぐな髪を鎖骨まで下ろし、豪快に足を組む白衣の間診者。「医師ではない」のは、ここを紹介してくれた付き人のヒザキに教えられており、ぶっきらぼうに尋ねる相手にかえってヒュウガは好感を持った。

何しろ、裏表の差が激しい従妹を持ったおかげで、美人でも媚びが感じられない女性はそれだけで安心感があった。

「ええと……何と説明したらいいか、僕も、よくわからないところはあるんですけど……」

改めて一度深呼吸をする。この、山奥の盆地にある隠れ里のような館に訪れた理由を、ヒュウガはまとめて思い返した。

「最近、気がついたら、知らない間に時間が過ぎているんです」

「……意識を失ってる、ってこと？」

「そうだと思います。誰も実際に目にした人がいないので、僕も確信はないんですけど」

言っている自分ですらも、どうにも要領を得ない言い出し。しかし相手は気にせず、冷静に問い返してくる。

「目撃者が、いない？」

「はい。いつも、時間が過ぎる前も、過ぎたことに気付いた時も。その間の自分が何をしていたか、知ってる人は全くいなくて」

そこまで言うとヒュウガは、探る思いで、相手の髪と同じ色の切れ長の目を上向きに見つめた。

今まで、こんなおかしな話をして、自分を変な目で見なかった人はいない。

「それで、実際にあんたが、日常に支障をきたすようなことはあるのか？」

「.....今のところは、特にないですけど」

「まあでも、気味が悪い話にはなるな。何も起きてないのがおかしいくらいだ」

さすがにその可憐な顔で、この男口調はどうなのか、とヒュウガは思った。戸惑いながらも話を続ける。

「はい。いつこの、時間や意識の空白が、大事な時に起こるかもわかりませんし.....何が起きているのか、どうしたら起きないようにするのか.....こんな変なことでも、相談に乗ってもらえるときいて、こちらに伺いました」

一息に言ってのけた。それはひとえに、まだこの相手が嫌な顔をせずに、真剣に話を聞いてくれたからだろう。

そんな意味不明なことを言って、人目でもひきたいのか、と。従妹に哀れみの顔で言われた時には、ヒュウガは本当に蒸発でもするか悩んだ。

それでなくとも.....。

「何か、そんなことが起こるようになってきた前後に、きっかけとか心当たりは？」

キレイな顔で淡々と尋ねる相手に、ヒュウガは少しむっとしてしまう。

その質問に意味があるのか、聞き返したい衝動を堪えて、静かに答えた。

「.....特に自分で、思い当たることはありません。ただ.....」

「ただ？」

「同じくらいの頃から、ずっと体調が優れないのはあります。周囲からは、それは祖父が亡くなったショックだろうって、飽きるくらいに言われました」

これまで努めて、ヒュウガは丁寧に喋っていた。けれど「心当たり」の質問が本当は不快で、普段の無愛想が出てしまった時、相手はふーん、と何故か楽しそうな顔を見せた。

元々ヒュウガは、人見知りだ。黒い目、黒髪の短髪に黒い学生服と、華麗な従妹や目の鮮やかな美人と違い、なるべく目立たないよう生活してきた。

そんな密やかな生活ながら、L地方の名家であるφ家の、D代目当主となるはずの彼は、後継ぎを心待ちにしていた祖父に目をかけられていたのは確かだった。

——僕だって.....その方が良かったけど.....。

正直、祖父が亡くなった時に、ヒュウガはほとんど何も感じなかった。だからその後の不調を祖父の死のせいにされるのは、至って不本意なのだった。

体調不良は、ただ単に、当主となる未来が迫ってきた重圧だと自分も思っている。祖父が亡くなった後、現当主の父はすっかり表に出なくなってしまった。そうなると否応なしに、まだ十六歳のヒュウガが頑張る機会も増える。

そのためにも、ヒュウガはこの妙な空白を何とかしたいだけ。

それでも今まで相談した相手は全て、「気のせいじゃないの？」と生温かい目でこちらを見るだけだった。

「……はっきり言って、わけがわかんねーな」

可憐な仕草で頬杖をつき、目の前の彼女は訝しげだ。けれどその声色には、不思議と嫌味は全くなかった。

ただ純粹に、何が起きているのかサッパリ。言葉通りの素直な感想を、そのまま悩んでくれているようだった。

「……こんな話。信じて、くれるんですか？」

「——ん？」

「ヒザキやユウハ以外、何言ってるんだって、まずとりあってもくれませんでした。それもそのはず——誰か他の人がいる所では、この『空白』は起きることはなかった」

「……」

彼女は色々な意味で、髪と同じ色の鋭い目に影を落とした。ヒュウガをまじまじと見通してくる。

「……たとえそれが与太話でも、依頼は依頼。疑問を挟む必要って、あるか？」

ぶっきらぼうに目をそらすと、淡々と言った。本当に美人なのに、勿体無い、と苦笑しながらヒュウガは頷いた。

「……そうですね。それなら、嬉しいです」

やっと少し、ヒュウガも表情を和らげることができた。

そこでにやり、と、彼女は思いもかけない台詞を次にのたまっていた。

「カワイイな、おまえ」

「——は？」

「くるくる顔が変わるな。そういうのいいな。普段なら下の奴らにふる案件だけど……特別に、オレ様が直々に受けてやろうじゃん」

オレ様、って……。さすがにヒュウガは、素直な思いを口にせずにはいられなかった。

「……その。それは、ないと思う」

「ん？」

「せっかくそんなにお綺麗なんですから……女の子がオレ様っていうのは、ちょっと」

それをきくと、彼女はああ、と嬉しそうに、キレイに笑ってヒュウガを見つめ直した。
「大丈夫だよ。オレ、男だから」
「……………はい？」

弧を描くように耳元を隠す、さらさらと長いキレイな前髪。細かいプリーツのロングスカートからすらりとのびた真っ白い足とミュール。

ヒュウガの耳は今、彼女から発された言葉を理解することを拒否した。
「……………はい!？」

……………拒否したかったが。生来の真面目さが災いし、誠実にきき返してしまった。
「君、男!？ スカート履いてるのに!？」
「そーだよ。履いてちゃ悪いか？」
「わっ……………」

そしてヒュウガの沸点はあっさり振り切れた。
「悪いに決まってるだろ、この、変態!!」
へんたい、へんたい、へんたい……………初対面にしては気安過ぎる罵倒は、山奥の洋館中に爽快に響き渡ったのだった。

レキ・カシュウ・K。L地方の隣にあるK地方の名家、カシュウ家の長男。
と言ってもあまりカシュウの名は知られておらず、その生業も謎の一言だった。
「そっかぁ、オレの名前も知らずにここまで来たのかぁ。ってことはほんとにおまえ、ここがどういう所かわかってないよな？」
「知らないよ、僕はただ紹介されてきただけなんだから」
ぶす、っと答える。これではダメだ、と思いつつ、相変わらず女性の格好で話を続けるレキに不快感を隠せないヒュウガだった。

確かにヒュウガは、自他共に認める常識人だ。それでもどうしてこんなに気分が悪いのか、正直自分でもよくわからなかった。
「ま、うちの方針については、おいおい説明していくとして、だ」
レキが指を鳴らすと、黒服の男が数人現れた。何故かがっしり、ヒュウガの両腕を掴んだ。
「——って、え、ちょっと!」
『『空白の精査・加療』……………依頼は了解した。それじゃ早速、『入陰』してもらおうとするか』
入院？ 平和な単語に聞き違いはしたが、不穏な雲行きに慌ててヒュウガは辺りを見回したが、護衛のヒザキも召使のユウハも駆けつけてはくれなかった。
「入院って、何で!？ どうなってるのさ!」
「ん〜。悪いけど、今夜は帰さないぜ♪」
口調はあくまで軽いが、一転してレキが目つきだけは真剣にヒュウガをみつめた。

「何ていうか、おまえ、死相が出てるんだわ。どうやら一刻を争う事態みてーだな」

わけがわからない、と言っておいて、あまりに唐突な死亡宣告。どう考えても詐欺としか思えない。

「って、君、下の人に任せるくらい、って言ってたじゃないか！」

「そりゃー難易度の話。緊急性とはまた別」

最も、難易度も高いかもしれねーな、と無責任にレキは口にしていた。

「んじゃ、さっそく」

黒服の男に体を押さえられ、身動きのとれないヒュウガの正面へレキがやってくる。

「最初だけ、ちょっと痛いから我慢しろよ」

「何それ、何だよ、何をやる気だ!？」

彼はヒュウガの額に、狐のような形に組んだ右手の人差し指と小指を当てると。

「たーんおーばー まっくす いちねん、」

その、真剣味が全く感じられない三言と共に、部屋の灯りが消えた。

額に走った電撃のような痛みに、ヒュウガは意識を失ったのだった。

*

「ってそれ、どう考えても強制拉致・監禁！」

がばっ!! っと、自身の盛大なツッコミでヒュウガは目が覚めた。

「.....ヒュウガ様？」

突然起き上がった彼に驚きつつ、その様子に安心した顔の女性が隣に座っていた。

「あ.....ユウハ.....」

「ご気分はいかがですか？ そのお顔なら、悪い所はなさそうですね」

ふふ。と微笑み、ヒュウガの額に手を当てる。

「えーっと.....いったい、どうなってるの、僕は」

「ここはカシュウの館の客室。ヒュウガ様は問診の途中で、意識を失われたとお伺いしました」

黒いセミロングの髪をかきあげ、同年代なのに落ち着きの違うユウハ。優しい笑顔は、飛び起きたヒュウガの心臓を少しずつ落ち着かせてくれた。

「今、何時？ どうしよう.....父さんは何て言うかな？」

「お館様には、ヒザキ様が連絡して下さったはずですよ。ヒュウガ様にはしばらく、加療が必要であるとのことなので.....明日、必要な物を持って参りますね」

そう言うとユウハはヒュウガに一礼し、部屋を出ていったのだった。

——……ふう……。

大きく息をつくど、もう一度横になった。

「……何だか、えらいことになっちゃったな……」

知らない天井を見上げて、一人眩く。気を失う直前に痛みが走った気がした額は、ユウハから見ても自分でさすっても、特に異常はないようだった。

体も額も何ともないなら、何かされたわけではない。もしや例の「空白」が、初めて人前で起こってくれたのかもしれない。それなら話も信じてもらえるだろうし、対策も立てやすいかもしれない。

何事も先回りして考える癖のあるヒュウガは、あえて楽観的に考えて自分を落ち着かせようと試みた。そうもしないと、見知らぬ部屋に一人、平静を保てるはずもなかった。

——あれ。でもヒザキは父さんに何て言って、ここにいていいことになったんだろう？

急にまた、ヒュウガは不安になった。

そんなヒュウガに応えるように、その場に降り立った人影があった。

……文字通り、天井裏から忍者のように現れた、黒いケープで学生服を隠している彼。

もう慣れたことなので、ヒュウガはあえて追求はせず、別の不満を開口一番にハッキリと告げた。

「どこ行ってたんだよ、ヒザキ。ヒトが傷害・拉致・監禁されかかってたかもしれない時に」

「面目ありません。館の内部構造の再把握に少々時間を要しました」

それはこれまた、同年代のくせに落ち着き過ぎた板前のような、とげとげとした短髪の風貌の青年。

付き人が同年代ばかりなのは、目立たないように生活するヒュウガの趣向だ。同じように名家らしいこの館の当主……女装していたレキにはどんな印象で映ることだろう。

少なくともヒザキは勝手に館の内部に出入りし、もしもばれたら、と思うと頭の痛いヒュウガだった。

「あのさ……部屋に盗聴器とか、ない？」

先程の会話が、聞かれていたら嫌だな。そう思って真っ先に尋ねる。

隠密に行動させているヒザキの存在は、とりあえず明らかにはしたくなかった。

「私が検分した範囲では、認められません」

「そっか。……それで、僕はここから脱出させてもらった方が良さそう？」

護衛役のヒザキが姿を現したなら、そういう事態であるのかと。これまでの危機管理と違うパターンではあるが、ヒュウガは心の準備を定めていく。

しかし、返ってきた答は意外なものだった。

「お館様から、伝言をお預かりしています。務めは気にする必要はなく、今は加療に専念するように……とのこと」

そっか。元々ここ、薦めたのはヒザキだけ。ようやく本当に安堵し、はあ、と息をついたヒュウガだった。

「それではこれにて。御身に危険が及ぶようなら、すぐにもお呼び出しを」

現れた時と同じように、ヒザキは唐突に天井裏へと消えていった。

「で……あれ？」

結局ヒザキ、父さんに何て言って許可をとったんだろう？

当初の疑問は晴れないまま、もう一度深い睡魔が押し寄せてきた。

一安心したヒュウガは、そのまま眠りの世界へと落ち込んでいった。

*

目が覚めた時には、時計の針は六時。

瞬きをした後には、七時になっていた。

——知らない間に時間が過ぎてるんです。

「……………」

普通に考えれば、二度寝したんだろう。その程度で済むことであるのに。

「……着替えてる……僕」

何の準備もなかった昨日は、そのまま学生服で寝ていた。それなのに今は、見覚えのない室内着に着替え終わっている。

「おはようございましゅ♪ ご機嫌いかがでございましゅか、お客しゃま♪」

びくぅ！ と背筋が伸びる。

突然響いたあまりに場違いなカン高い声に、ヒュウガは、え！？ え！？ と周辺を見回した。

「ここでしゅ。ここ、ここ！」

「ここって……うわああ！」

寝ていたベッドの右脇で、身長はベッドの高さプラス三十センチあるかないかの幼い少女が、背伸びをしてベッドの端を掴み、ヒュウガを見上げていた。

「あしゃご飯はいかがいたしましゅか？ WA食派？ YO食派？」

「って、えっ……朝、ご飯？」

「はぁーい、あしゃなのでーしゅ♪」

にこにこ満面の笑顔で、幼女は小さな左手で時計を指差した。呆気にとられていたヒュウガは、そ、それじゃWAで……と事務的に何とか返事をする事しかできなかった。

幼女は嬉しそうに、りょーかい！ と頷くと、パタパタと手を振って部屋を走り出ていった。

「……」

しばらく、思考停止していたヒュウガだったが。

おそらく幼女が持ってきた、ガラスの水の入れ物とコップにおしぼりがサイドテーブルに置かれているのを見て、ようやく事態を理解していた。

「ア……アイ、ツ……！」

再びヒュウガの沸点が振り切れた所で、良過ぎるタイミングで彼は訪室してくるのだった。

「おっはー、目が覚めたってー？ オレ様のベッドは寝心地いかがだっ……」

「この変態男っ、あんな小さな子をメイド代わりに働かせてるなんて！ どういう神経して生きてるんだよっっ！」

扉を開けるなり、レキの胸倉を掴んで部屋に引っ張り込んだ。笑顔のまま冷や汗だらだらなレキを、鬼のような顔でヒュウガは睨みつけた。

「……えーっ……と？ おはようございます、ヒュウガ、さん？」

えへへ？ と、わけがわからず笑うしかないレキに、ヒュウガは立て続けにまくしたてる。

「この館の管理体制はどうなってるんだ！ 君が当主！？ こんな変態が趣味に走った名家は、末路はどうなってしまうんだ！？」

「……ええーっとー……ヘンタイを差別するのは、良くないんじゃないか？」

ちらり、と部屋におかれた水の一式を見て、何となくレキは状況を理解したようだが……。

「でもね、今日はオレ、ちゃんと男のカッコしてるぜ？ それを見てからヘンタイかどうか、良ければ判断してほしいな～」

へ、と。思わず胸倉から手を離し、全体像を見るため一歩後ろに下がったヒュウガは。

「……」

黒のタンクトップに灰色のジーンズ。首の後ろで一つに束ねられた髪は、確かにシンプルな男らしさを漂わせていた。相変わらず途方もない美形ではあるが。

「……まとも、だ」

「でしょ？」

「というか、格好いい。キレイだし、格好いい、と。」

単純な衝撃に毒気を抜かれて、大人しくなったヒュウガに、レキは改めて、おはよー。と無防備な顔で笑いかけた。

「その様子じゃ、好調そーだな。今日は早速『入陰』すっから、体調整えとけよ」

「……は？」

入院。もうここにいるのに、そうじゃないの？

未だにヒュウガが何もわかっていないことは先刻承知なのか、レキは楽しげに部屋のクローゼットを開けて色々取り出していた。

「平たく言えば、精密検査みたいなモンだ。——ほい。昨日は風呂も入ってねーだろ？」

バスタオルにハンドタオルを投げてよこした。ぼかん、としているヒュウガに背を向け、じゃ、と部屋を出ていった。

「館の案内は婆やに任せてあるから。朝メシ後に連れてかれるだろーし、一緒に持っているな」

振り返り際にそう言って行ったレキの横顔は、あまりに端整だった。うっかり見惚れてしまったので、彼が行ってからしばらくするまで、幼女の件を追及することをすっかり忘れていたヒュウガだった。

——……というか。

更に恐ろしいことに、気が付いてしまった。

——さっきのコの件も、凄く気になるけど……男に見とれてる僕って、どうなんだ！？

そうして朝食の用意が整い、幼女が再び部屋にやってくるまで。ヒュウガはバスタオルとハンドタオルを握り締めながら、わなわなと立ち尽くしていたのだった。

*

「ええと、でしゅね？ レキしゃまは別に、女しょう癖というわけではないのでしゅよ」

その、自分が「婆や」と名乗る幼女を前に、ヒュウガは混乱を乗り越えて放心していた。

何とか朝食だけは終えたヒュウガに、「婆や」は館を案内しながら理解困難な話を続ける。

「あれは完じえんに才能、というか特技でしゅ。始末の悪いことに実益を伴っているの、日々磨きをかけんとしているのでしゅ」

館はわりと広く、ヒュウガに必要と考えられる食堂、浴場等の案内を終えると、婆やは「他に気になることは？」と、案内が終わりである旨を告げた。

「……気になること、って……」

言われれば、そりゃ……と。

「あなたは、どうして婆やなんですか？」

「んぬぬ？」

にこにこ笑顔を絶やさない幼女は、実際には禁忌ともなりかねない質問に対し、あっさり本質を明かしてくれたのだった。

カシュウという古い血の名家の伝える、とても特殊な力の一端を。

この、一見は自然と文明が適度に共存した深世界には、幾つもの「名家」がある。

ヒュウガの実家、φ家もその一つだ。少なくとも一つの地方に三つは名家の血筋があるとわれ、その家に属する者には、代々約束された「力」が受け継がれるのが常識だった。

「力」なんて仰々しいことを言っても、その内容や継承の方式は家系によって異なる。直系の血族に遺伝によって継がれるのが最も一般的で、大体の家では一子相伝なのが普通だった。ただそれだけでは血脈が絶える危険もあるため、それぞれの家系で例外的な継承法があるのも常道だった。

昼下がり、予定より遅れて「入陰」の準備をするレキに、必要だから、とヒュウガの家の「力」についてきかれた。

「……うちは、力自体は地味で、僕がこれだけ地味なもの、当然とか思っちゃいそうなんだけど」

「お？」

内実は話せない。そう言うと、別にいい、と返してくれた。申し訳ない思いでヒュウガは質問で返す。

「……君の所は、地味みたいでも、随分特殊な力だよね。五十歳の人が五歳に若返る能力なんて、さぞかし羨望の的じゃない？」

「その代わり、半日は五歳でも、残り半日は九十五歳の人生だけだな」

そのままレキはあっさりと、カシュウの力の内容を明かす。

本来、名家に伝わる力は極秘にされるのが常だ。しかしカシュウの場合は事情が違った。

「婆やはあれしかできねえけどな。使い方によっちゃ、わりと何でもできる力だからな。食い扶持を稼ぐにはもって来いなわけ」

あくまで口コミだが、代々伝わる力を利用したよろず相談で、レキは生計を立てているらしい。そうなると力を隠し通すのはむしろ非効率となる。

「ところで、体調はもう大丈夫なのか？」

「……うん。悪かったね、何も言わずに待ちぼうけにさせて」

婆やと別れ、風呂を借りて、部屋に戻った朝の後だ。気がつけばまた婆やが食事を呼びにきており、知らない間に過ぎた時間は、何時から意識がないのかも覚えていなかった。

「やっぱりその『空白』、誰もいない時に起こるんだな」

「……」

昨日の場合は意識を失ったのは、レキが「入陰」の前処置を済ませた副作用だろう、ということだった。

「にしても……そんなに『空白』が続くなら、自宅なら誰か見てるだろ？」

「今まではせいぜい、長くて三十分くらいだったよ。こんなに頻繁に起こることもなかったし」

「ふーん……」

起床後の空白、朝食後の空白。一人の時間が増えた影響ならまだ良いのだが……。

「進行してるとか……考えたくないなあ」

はあ、とヒュウガは、抱えていたクッションにぼすっと頭を埋めた。

「まーまー。いきなり環境が変わったから、疲れてんだろ」

無理もねーよ、と今まで作業をしていた隣室からレキが出てくる。

壁にもたれて膝を抱えて俯くヒュウガに、しゃがんで視線を合わせた後で、準備できたぜ♪ とにこやかに告げた。

「……」

不安げにじーっ、とレキを見てしまうヒュウガに、

「大丈夫、痛かったのは昨日で終わりだって。こっから先は、おまえはぼけっと、そこで立ってるだけで全部済むから」

部屋の中央を指差し、そこに立ってくれ、と促してくる。それでもぶすっとした顔のヒュウガに、そんなに痛かったかなあ？ とレキは改めてヒュウガの額を見てきた。

「……全然覚えてないんだけど。あれ、何だったのさ？」

別にヒュウガは、実はそんな質問はいつでも良かった。

レキには何やら、ヒュウガが機嫌を損ねているとみえたようだが……レキの端整な顔がすぐ前にあり、その上細くて真っ白な指を額に当てたりするので、ぼふっと沸騰した顔をクッションから上げられなかっただけだ。

——やばい……今、僕、完全に……。

「単に、これからおまえの流れに干渉するわだから、先にオレとのパスはつなげた方が、式がみえた時の手間も省けるしな」

——どきどきしてる……絶対顔赤いし！

「オレが心を奪われるほどの相手だったら、わざわざつなげなくても力が通じんだけど。とりあえず今はお友達からってことで——」

そうしてせっかくレキがまたカシュウの力を話してくれているのに、全く頭に入らないヒュウガだった。

——ていうかヘンタイ、ヘンタイだ、僕！！

脳裏によぎった嫌悪感を必死で振り切るよう、唐突にヒュウガは立ち上がった。

……お？ と、しゃがんだままのレキは、不思議そうにヒュウガを見上げたのだった。

「ま、事が終わればちゃんとソレは消すから。しばらくは前髪で隠しててくれな」

「へ？」

「本当不便だよな～。こうでもしとかなないと、いちいち触れなきゃ流れの式を進められねえんだからよ」

レキが立ち上がったヒュウガを部屋に招き入れる。床一杯に描かれた幾何学模様の始点に立たせて、準備は整った、と告げられた。

「ところで、おまえ。暗いの、平気か？」

「へっ？ ……べっ……」

別に、苦手ではないけど……そう答えようとして、待て待て！ とヒュウガは、先回りして考える癖が大発揮され、まさか、と周囲を慌てて見回した。

窓がなく、暗い色のカーテンで出入り口を全て囲まれた室内。ご丁寧にも、電灯からの残り灯も完全に遮断するように覆いがされている完全な暗室だった。

「暗がりに連れ込んで何するんだよ！？」

事もあろうにその言い方に、一瞬止まったレキだったが。やがて耐え切れないように、冷静な顔を崩して大笑いを始めた。

「！？」

「それだけ余裕あったら、大丈夫だな」

まだ笑いを大量に噛み殺しながら、レキがぼちっと部屋の電灯を切る。

「それじゃ、しばらく、じっとしててくれ」

完全な闇に最も近付けた、「陰」の空間の効果。何物にも邪魔されることのない、純粋な「流れ」がレキの前へ浮かび上がったのを、本来ヒュウガがわかるわけはなかった。

——……え……？

その眩きは、いったい誰のものだったのか。
真っ暗な黒い闇の中で、床に浮かび上がる幾本もの鮮やかな光の道筋。
元々描かれていた、まるで一つの分水界のような幾何学模様。それらに助けられて、レキの目にはそうして、ヒュウガという命の流れの水系が映っている。

「たーんおーばー まっくす じゅうねん、

思っていたより難物な本流辿り。誰かのそんな声が聴こえた気がした。
昨日の入陰、一年設定での簡易試行の時にも、難易度の見誤りは明らかだった、とその「心」は考えている。

——……まいったな。もしかして、コレ。

なまじ最初にみえた流れが決定的だったため、まさかここまで難物とは予想していなかった。そんなレキの心の眩きが、そこから先はヒュウガには届かなかった。

十年設定に切り替えても大きく変化がない。ということは、おそらく発端は……。

「……キレイ……」

——……！？

おかしい眩きが、レキの耳に届いたようだった。

色々な意味らしい衝撃が、レキの心中からヒュウガまで伝わる。

——……あいつ……。

軽く顔をしかめながら。潔くレキは、この場でこれ以上の追求は諦めていた。

カチッと、電灯の明かりが生き返ると共に、部屋の覆いも開放されていた。

「……あれ？」

明かりがついたことに気がついたヒュウガは、ぼけ……とした顔をしつつ、やがてきょろきょろ、と辺りを見回して首を傾げた。

「えーっと……終わったの、レキ……？」

部屋の扉のすぐ近くにいる、レキを不安な思いで見る。レキが何やら真面目な顔で、うーん、と腕を組んで考え込んでいるからだ。ヒュウガの心細い声には気がついていないようだった。

「……え？」

難しそうなレキの目を見て、ヒュウガはハッとしていた。

髪の毛と同じ色だった董色の目が、光の色としか形容し難いような、不思議な色彩へと変わっている。もう一度、レキ……？ と声をかけてみても、その音は全く、彼には届いていないようだった。

長く感じられた沈黙は、レキの目の色が元に戻るまで、数分の間続くこととなった。

「わりい。オレ、『みて』る間は、流れ以外はみえないし、感じなくなるんだ」

「……？」

「視覚だけがある状態だから、こんな部屋を用意するんだけどな。ここなら一切、流れ以外は、目に入る物はなくなってくれるから」

先程から何度も、レキの言葉に出る「流れ」という単語。婆やの話をした時、カシュウの力について教えてもらったことは、「流れを戻したり、進めたりする力」ということだった。

その「力」は、かなりの誤解を恐れずに言えば、ある化学反応式を意図的に操作できる、便利で万能な触媒のようなものだ、と。レキはそんな風にヒュウガに説明を加えた。

ある現象と現象の間につながり——何らかの流れ、反応式が見つかるのなら、それが不可逆な式でも、過去未来どの方向も、一時的に流れに干渉することができる。それにより望む形を導いて得る……あの婆やのように、五十歳の姿から五歳の姿まで、流れを戻すことも可能となる「力」だというのだ。

ただしその「力」の効果は、あくまで一時的であるらしい。もしも干渉した流れを戻したのなら、その後は戻した分だけ逆に流れが進められるという。

たとえば本来、五十歳である「婆や」は一日の半分に力を使って五歳の姿となり、その反動で残り半分は、九十五歳の姿まで流れを強制的に進められる。そうしたちぐはぐな毎日を生きているということだった。

そんな力が、ヒュウガの詳細不明な「空白」のために、どんな役に立ちそうかと言えば。「残念だけど、今日は何もみつけれなかった。コレは本格的な準備をしないと、ヒュウガがどうなってるのかも、そうなってる発端も、見つけれそうにない」

「え？」

ある違和感に、ヒュウガはぼかん、とレキを見つめた。レキはそれには気付かず、硬い美形顔のまま話を続ける。

まだヒュウガに話していないこととして、加えて言う。現象と現象とのつながり——在り得る流れをみつけること自体が、本来のカシュウの能力となる。

「それがみつければ、一度今の流れを発端に戻して、反動をうまいこと支流に流せば、『空白のないヒュウガ』の支流を本流にすることもできるんだけどな」

そこまで話すと、わりいけど、今日は無理だったぜ〜、なんて笑って言った。物凄く大きな話であるのに、あまりに気軽に話すレキのせいで、ヒュウガは事の重大さについて全くぴんと来ないままになった。

……と言っても、ぴんと来ないだけで、話のシビアさはわかっている。

土地は違えど名家の一員として、それに気が付いていないヒュウガではなかった。

「……レキ。昨日、君は、僕は差し迫った事態にいるって言った」

「……」

「あんまり聞きたくないことなんだけど……それって、今のままなら僕は、近いうちに何か悪い所に流れつくってこと？」

言ってみれば、彼の「流れをみる」力は、未来予知や過去探知にも近いことだ。

「死相が出てる」、と口を滑らせたレキの言葉を、ヒュウガは決して忘れてはいなかった。

「……ひょっとしたら、近い内に、僕は死ぬかもしれないようなことがあって。それを君は、何とか変えようとしてくれてる……そういうことに、なるの？」

そう思えば昨日のレキの、強引な入院騒ぎも納得できるヒュウガだった。

「んー？」

レキは、真面目に尋ねるヒュウガに対して、終始きょとんとした表情を変えていなかった。

「そういう解釈も、できなくはないけどさー」

おまえ、結構鋭い方だよな〜とか、笑顔のまま相変わらず軽口を叩く彼だった。

「……」

これは、レキなりの気遣いなのだろう。苦い顔をしながらヒュウガは悩むこととなる。

彼のように気楽に考えていいことなのか……それとも、ヒュウガに不安を与えまいと、あえて気楽な態度を通してなのか。

「それよりさー」

「陰」の部屋でそのまま座り込んで話をしていた彼らは、昨日初めて会ったとは思えない気安さで話し続けていた。

「メシ、一緒に食いにいかねえ？」

「――へっ？」

「朝昼は別々に食ったけどさー。どーせ数日、ヒュウガはオレの部屋で寝泊りすんだし？」

「レキの……部屋？」

そ、と。

「昨日は明け渡してやってたけど、さすがにオレも何日も部屋に帰れないのはちょっとな。こーなったら運命共同体、ってことで」

あ、そうそう、と。あまりに自然な笑顔で、彼は不自然な台詞をやっと切り出していた。お互いがこっそり気付いていたある違和感に、先に切り込んだのはレキの方だった。

「オレは、レキ・カシュウ。遠慮なくレキって呼んでくれていーから」

「……………」

それはあまりに、今更改まった自己紹介の上に。

もう、呼んでるし、と。レキの自然な笑顔に、ヒュウガはぶすっと、不貞腐れることしかできなかった。

「……僕はヒュウガ。……ヒュウガ・D・φ。……あんまり気安く呼ばないでほしいけど」

ていうか、と。丸一日経たない内にいったい何度、この手のツッコミをしたのだろう。

「ていうか君、何でこんだけ広い館で自分の部屋に客人を泊めたりするんだよっ！」

えー、だってその方が一番安全だしなー？ などと、常識では考えられない発想をするレキ。

自分は至って常識人、と自負するヒュウガは、大きくため息をついたのだった。

*

結局レキと、一緒に夕食を頂いてから部屋に帰った。何とか今日はまだ、部屋の独占権を維持することに成功したヒュウガだった。

「……誰かと一緒に寝泊りとか……冗談じゃない」

別にこの部屋でなくていいので、一人で使える部屋を貸してもらえないか。そう頼んだのだが、レキは曖昧に頷きつつも言った。

「そうしてやりたいのは山々なんだけどさ。一応オレの部屋、この館で一番安全なスペースなんだわ。あのレベルを別に構築しようと思うと、もう四～五日はかかっちゃうわけ」

「空白」は増えるわ、ヒザキに実は侵入はされているわで、どういった意味で安全かはヒュウガにはさっぱりわからなかった。と言って、ヒザキの存在を明らかにするわけにもいかないの、その詳細を尋ねることもできない。

それに……と。

「ヒュウガの『空白』、できればしばらくなるべく傍について、一度この目で確かめられるにこしたことはないんだけどな」

「……………」

ヒュウガも、その必要性はわかっていた。けれどかなり長い時間、自分を陰から守っているヒザキですら、その「空白」を目にしたことはないというのだ。

そうなると、今日一日の出来事だけでも、導かれる結論は一つとなってくる。

「ひょっとして……僕って、多重人格とか、なのかな」

誰の目にもわからない「空白」。ということは、その時間は意識を失っているわけではなく、きちんとヒュウガとして、傍目からは違いがわからない程度に活動を保っている。

そうでなければレキの言う通り、誰かが今まで気付いていたはずだ。φ家には沢山の使用人がいて、ヒュウガが一人になれる時間など、実際はほとんどないのだから。

「……………」

もしも多重人格だったら、どうだと言うのだろうか。「空白」の時間にヒュウガの代理をしている自分を、レキのあの「流れをみる」目なら、見抜くことはできるだろうか。

「元々……人に、自分のことをみられるのは嫌いだけど……」

その上それが、あの軽口のレキ相手となると、何をしてるかわからない自分をみられるのはとても嫌だ。正直、そんな懸念が先に立ってしまったヒュウガだった。

「でも変だよな……別に僕、虐待された過去とかがあってもないし。多重人格って、そういうものじゃなかったっけ……」

「——虐待、ですか……？」

「てっっ！！」

突如として、部屋の中に入ってきていた彼女に驚く。

「び……びっくりした……何だ、ユウハか」

「私もびっくり致しました……ヒュウガ様、何かあったのでしょうか……？」

「……………」

いや、別に……と。心配させまいとして笑うヒュウガに、尚更、目をくもらせるユウハの姿が何だか印象的だった。

「あ、そうだ。荷物、持ってきてくれたんだ？」

「……………」

ユウハがすまなさそうに、目の前で表情を曇らせた。

「……ヒュウガ様の不在が……叔父上様のお耳に入ってしまった」

「——……………」

それは、実は先程、ヒザキからの伝書で既にヒュウガも知っていたことだった。

「叔父上様も、アリデア様も、ヒュウガ様を探しておられます。私があまり出入りをすると、見つかってしまう恐れがあると思って……」

「……そっか。……助かったよユウハ。あの二人、まだ諦めてなかったんだな」

「こちらではヒザキ様しか、ヒュウガ様の護衛をする者がおりません。どうか、くれぐれも……無茶はなさないで下さいね」

「うん。ありがとう、ユウハ」

叔父に気付かれた。それなら、とヒュウガは心を決めた。

「しばらく、ユウハも身を隠した方がいい」

「……ヒュウガ様」

「さすがにヒザキも、僕とユウハ、二人揃って守るのは難しいと思うし。悪いけど僕のためだと思って、ユウハは別に何処かで隠れててもらえると有難いんだ」

ヒュウガがこんなに棘のない声を出すのは、おそらくユウハに対してだけだろう。

それはユウハが、一番無力だからで――

それがわかる彼女は、痛ましいものをみるように、しばらくヒュウガを見つめていたのだった。

＊

翌朝。レキと共に食事をとるのは、二回目になるヒュウガだったが。

「ところでさー？ 目玉焼きって、醤油派かソース派かに分かれるっていうけど、正直、塩コショウがあればどっちも大差なくね？」

相も変わらず、どうでもいいような話題しか出てこない食卓に、ヒュウガはぶすっとフォークで卵を突き刺す。

「……僕は、元々、目玉焼きは嫌い」

ヒュウガの機嫌は誰の目にも見えて悪かった。客人という立場なので、遠慮する必要は確かにないのだが……それでもここまで余所様のお宅で無愛想になれる、本来は良い子な人間は珍しい。

「へー、そーなんだー。残すんならもうぜー」

そんなヒュウガを全く意に介せず、ホストであるレキのもてなし放棄ぶりも潔いが。これは何も考えていないだけだ、とぼっさりヒュウガは内心で斬っていた。

「……」

最早敵意を込めた目ですら、前にいる美形の青年を見つめてしまう。

……というも。

「今日はまた一段と、可愛らしい出で立ちなことで……そんな格好で何処に行こうと言われるんですか？ カシュウさん」

「よくぞ聞いてくれたな。今日は一日、気分転換に遊びにいく所存なのさ」

白いワンピース、白いリボンで髪を二つ括りにし、どう見ても可憐な女の子のレキ。

ヒュウガは改めて嫌悪と敵意を込めた目で、遠慮なくレキを睨み続けるのだった。

「というか。のんびりし過ぎだろ、君」

本当にヒュウガを連れて、レキは館から二km程離れた小さな谷川に行き、水遊びに興じてしまっている。容赦ない文句をついにヒュウガは口にしていた。

「これで加療期間が長引いたとか言っても、一文だって追加料金なんか払わないよ」

「わかってらーって。長引けば損をするのはオレばかりと言いたいんだろ、ヒュウガは」

「何言ってるんだよ、僕の時間の方がよっぽど損だよ！　君みたいに暇じゃないし、一刻も早く家に帰って仕事しなきゃいけない身の上なんだよ！」

うはは一、厳しいなあ、と。ヒュウガの剣幕は意にも介せず、マイペースにレキは遊び続ける。

水場には近寄らずに岩に座ったヒュウガの前で、両手で水を掬いあげて喉を潤すレキは、本当に可憐な一枚の絵のようだった。目を離せないのがヒュウガは悔しかった。

「こーいう時くらい、ビョーキを理由に楽をしたらいいのに。おまえほんと、頭固いな？」

何の邪気もない口調で、にこにこレキはヒュウガの胸をぐっさり突き刺す。

それでもいつもツッコミを返す、誠実なヒュウガの反応を楽しんでいる彼に、ヒュウガはまだ気付いていない。

「そんな発想、思い浮かぶことも信じられない。君には責任感ってものがないの？」

「あるよー。でも無理な時は無理なんだから、それは仕方ないしさ？」

——ヒュウガは気付いていなかったが。

ぐっさり刺された反動か、ある意味レキの本質を突く問いをしていたことに、この時のヒュウガは気付かなかった。

それほどレキは、たとえぐっさりと来ていても、動揺や強い反感を示すことができない人間なのだ。

「——なあ、ヒュウガ。おまえんとこの家の、力の条件って……なに？」

「……？」

いつから切り替わったのか、レキが女装のままマジメな空気になっていた。

「力の内容を教えろとは言わねーよ。うちの力は、身に宿すにはちょっとした代償が必要なものでさ。力自体も特殊なら、継承方法の例外も変わってる」

それなら他の家の力ってどんなものかな、と。実際あまり興味もなさそうにレキが尋くので、つついヒュウガも、口を滑らせてしまった。名家同士という気安さと、昨夜から一人抱えていた不安も手伝ってのことだ。

「……うちは、血統以外の代償は必要ないよ。ただ、継承方法の例外がちょっときつくて、おかげで命なんか狙われたりしてる」

「ほお？」

「命というより、正確には血だけど。うちの力は一子相伝で、後継者が一人生まれたら、それ以外に力は全く振り分けられない」

つまりその結果、後継者の血を継ぐ後継者か、もしくは、
「うちの婿養子の叔父は、自分の所に後継者ほしさに、僕と娘を結婚させようと躍起でさ。それが叶わなければ、僕の全身を食らうくらいはやるんじゃないかな」

力を奪うには、後継者の血をすすするような過程がある。さすがにそれはしないだろうが、従妹以外との婚姻は確実に邪魔をされる。

「.....なるほどね。多分、血そのものを取り込んでしまえば、部外者でも力を継承できる家系ってわけか」

「そう。だから余計に、より厳密に後継者は決められてきた。相応しくない者は生まれた時点で間引きされたりね」

まず名家の力は、一子相伝が多いために、一夫多妻制を採用する家がほとんどだ。決して外部に血を分けないために、家の内で厳重に女達とその子を管理するのだ。

「へー.....ってことは、だ」

それは当然と言えば、当然の流れで。

「それじゃヒュウガは、従妹を連れ合いにしなきゃ、叔父貴に食われる運命ってか？」

「.....その通り。本当、我ながらつまらない選択肢しかないなあ、とは思うけどね」

恨むなら、その道のプロという感じの非道な男を夫にした、元々敵対していた叔母を恨むしかない。

「従妹は、可愛いのか？」

「正直、苦手。レキのが美人だし」

っと。実家のことを喋り過ぎた上に、ぼろっと零してしまった本音に、口を押さえるヒュウガにレキが笑いかける。

「何だよ、わかってんじゃーん♪」

「見た目だけはね！ 君がヘンタイでなければ言うことはないんだけどね！」

「えー。せっかく美形に生まれたんだし、使えるものは使わなきゃ損じゃん？」

「何に使うって言うんだよ、何に！」

君は僕を誘惑でもしてるのか！？ と口に出しかけて、慌ててヒュウガは止めた。

.....そんな本音は、一生本音とは認めない。

最早明らかに、自分がレキの容姿に一目惚れをした状態でも.....同性へのそんな想いはヒュウガは認められない。

「おまえ本当、頭固いな〜」

「.....レキんとこの力は、代償って何なのさ」

何とか話を変えよう、とどうでもいいことをヒュウガは尋ねた。普通は簡単に答えてもらえるはずのないことを。

そこであっさり答える、レキもレキだ。

「んー。オレ達の力はその代償に、心.....感情の機能を一部欠落させる」

「.....え？」

「オレの親父は『嫌悪』がなくて。そのまた前は『憎悪』が欠落。オレは、そーだな.....」

そこでヒュウガは、初めて、

「あえて言うなら『激情』かな。オレ、何事にも生まれつき、一生懸命になるのができねーんだ」

レキから笑みが消えたことに気がついた。思えば今までもずっと、その笑顔は簡単に消えていくような軽さだったことに。

「そんな欠落を持ってないと、流れをみれる余分が生まれないんだと。欠落が大きければ大きいほど、流れをみる力は強くなるって」

流れをみる力の強さは、流れに干渉する力とはまた別なんだけどな、とだけ、後でレキは付け足していた。

「.....」

色々、何か腑に落ちたような.....ますますわからなくなった心に、ヒュウガは戸惑ってしまった。

「それじゃあ、君は.....」

—— シキオリノ ミツギニ ココロナドナシ ——

「.....何を目的に、生きて、いるの.....？」

その声は誰が、ヒュウガにささやいたのだろう。

何に対しても、一生懸命になれない。

それはひたすら、当主となる目標を持ち、必死に生きてきたヒュウガにとって——

「だって、じゃないと.....」

そんなの、カラッポで辛いじゃないか、と。後継ぎであることの責任感で頑張れた心から、同情が零れた。

ぽつんと呟いた声。その感情的な振れこそが、レキには眩しいものとも知らず。

「.....帰ろうぜ、ヒュウガ。そろそろ水も冷たくなってきたし」

いつも通りの笑顔で、レキが呆けていたヒュウガにピッと水をかける。

「って」

何するんだよ、と睨むヒュウガに、
「襖あはせぎ♪」

軽く答えると水場から上がり、さっさと歩いていってしまった。

「.....え？」

一人では帰り道のわからないヒュウガは、慌ててレキの後を追っていった。



エピソード1 <後>

「疲れた……」

夕食後。レキの部屋のベッドに倒れ込み、今日も部屋の独占権を維持できたことに、ヒュウガはホッとひと息をついた。

夕食時にはレキは、黒く袖の無いタートルネックと七分丈カーゴパンツに着替えており、髪は下ろしたままだが中性的な美形青年という雰囲気になった。カジュアルでボーイッシュな少女とも見えるが、ヒュウガより身長がある分、まだしも許容範囲だった。「……ていうか。女性美より先に男らしさを磨いたらどうなのさ、アイツ」
「同感です」

——あ。……と独り言が止まる。

「着替え他をお持ちしました、ヒュウガ様」

まるで古い泥棒の絵のように、大きな風呂敷を背負ったヒザキが降り立っていた。

「有難う。悪いね、パシリみたいなことさせちゃって」

「私以外に適任はいません。お気になさらず」

「ごめん。……それより……」

ヒザキは、レキのこと知ってるの？ と。当然の疑問をヒュウガは口にした。

「そもそも、ここを薦めてくれたのもヒザキだし。……レキも、なんだか」

オレの部屋ならネズミも住みやすいしなー、とか何とか。まるでヒザキに気がついていようなことを、今日の争奪戦でレキは口にしていただ。

今更ながら、この十畳程のレキの部屋には、ベッド、サイドテーブル、小型クローゼット、ソファに加え、トイレと洗面所があるだけで、要するにホテルの一室にも近い。ちなみに普段着以外は別室にまるまるクローゼットがあるらしい。

机がないのは、執務がある際は婆やに見張られながら、ダイニングで行うためとのことだった。宿題をやらされる小学生か、とは当然のツッコミだ。

「カシュウの家とは並々ならぬ縁があります。最も、私を知る頃よりも、随分と様変わりはしているようですが」

「へー……そうなんだ。レキはこの部屋が一番安全だって言うんだけど、何でだろ？」

ヒザキは何か、気付くことはあった？」

ヒザキは、ふむ……と首を傾げながら、坦々と言った。
「この部屋には……物がありません」
「……へ？」
「最低限、寝泊りに使うような物しか置いてありません。後、ここには窓もありません。防弾仕様となっています」
「……」
大仰な……と息を吐いたヒュウガではあったが、自身も名家の血筋で、護衛を連れて歩かないといけない身の上や、更に非道な叔父を持つ身としては、笑い飛ばせないのが悲しかった。
「レキも苦労、してるのかな……」
そうなると、他の部屋に彼を居させることは、思わぬ負担をかけている可能性があると思いついた。

「ヒザキ。叔父さん達の動きは、どう？」
「……非常に、申し上げにくいのですが」
「知っておかないと、レキに迷惑かけるかもしれないだろ」
「一個小隊を動かしているようです。なるべく早めに事を済ませ、ご帰宅されねば、私一人ではお守りできないでしょう」
「小隊って……ちょっと」
うわあ、とヒュウガは頭を抱えた。
「そんなの……ここが見つかったらどうなるんだ。父さんは、何て？」
名家の揉め事は、基本警察の不干渉領域だ。名家そのものが通報したら別だが、この世界ではそれだけ「名家」の権力は大きい。
「お館様は、『絶対に抵抗するな』と仰せです。最悪の場合は、ヒュウガ様一人をお連れして落ち延びよう申しついております」
「っ……」
叔父の非道さは、自分も父も身にしみて知っていた。既に叔母は亡くなり、それも叔父の差し金だと父は語っている。

それでも父はヒュウガに、叔父の一人娘のアリデアを娶る必要はない、と。それだけは言い切っていた。
「父さんは……何を考えてるんだろ……」
ヒュウガとしては、叔父の目が黒い内は、思う通りにさせるしかないのでは、と思う。祖父が健在の間は叔父も大人しくしていたが、その後は叔父と父の対立が表面化し、それで父は表に立たなくなってしまったのだ。
そんな時に妙な「空白」で手間をかける自分も自分だ、と、自己嫌悪が湧き上がってくる。

「……レキに伝えておくよ。そんな暗殺集団に包囲でもされようものなら、どんな迷惑がかかることやら」

こんな事態を伝えたら、厄介払いをされるのは目に見えている。

自嘲しつつも、ヒュウガは静かに覚悟を決めると、レキの寝泊りしている客室へ重い足取りを向けたのだった。

「ふーん、一個小隊かぁ？　すげーなー、ある所にはあるんだな、金と権力……で？」

「……で？　って」

バスローブで緑茶をストローですすりながら、レキは呑気に窓の外を見ていた。

色っぼい。なんて思っている場合ではない、と頭を振るヒュウガに、逆に尋ねてくる。

「ヒュウガは、どうしたいんだよ？」

「僕が……どうするか？」

「だってそうだろ。これ以上ここで一人で身をおいてると、一個小隊に乗り込まれて、拉致られて叔父貴に差し出される危険があるってことだろ」

「……それは、そうだけど……」

それなら一旦、実家に帰る方が安全だろう、と。レキもヒザキと同じことを言うが、どちらも不思議と、今すぐ帰る選択は薦めてこない。

「うちの奴らには、今夜付けでしばらく暇を出してあるよ。守りは手薄になるけど、どーせ一個小隊に敵うわけもねーし」

「——へ？」

それはあまりに、手際が良過ぎる違和感。けれどそこにも気付かないほど、ヒュウガは驚いていた。

「拉致される危険を承知で、ヒュウガがここに残って。『空白』の調査を進める気があるなら、オレは付き合うぜ」

実にあっさり、レキは口にする。選ぶのは依頼主のおまえ、といつもの軽さで。

それは名家の当主というプロ意識なのか、単に事の重大性をわかっていないのか。

「僕は……」

選択肢A、すぐ帰る。選択肢B、ここに残る。そんなバカな映像が浮かんでしまったほど、状況はハッキリ二つの道へ分かれていた。

「……レキさえ、いいなら……ここに、残りたい」

強くしかめた厳しい目で、俯きながらもヒュウガはしっかりと答えた。

「——なら、何も問題ねーだろ」

対照的にレキは、嬉しそうにニカッと笑う。

「ところでさー。今日は『空白』、どっかで起きたか？」

「えっ？」

ヒュウガの今の状態を見ていて、まるで回答はわかっている、と言うようにレキが問うた。

「朝、川に行く前にはあったろ。でも帰ってから、今までは一度も起きていない……そうじゃないか？」

「……うん」

その回答を聞くと得心したように、レキは不敵な笑みを浮かべた。

「やっぱり、みえなきゃいい感じだな、それ」

わけがわからないが、納得している。そして改めて、ヒュウガをまっすぐに見て言った。

「明日が勝負の日だぜ」

「明日……？」

「できるだけ早い所、治って帰りたいんだろ。明日もう一度入陰して、決着をつけるか」

レキの、何かを決意したような眼差しと声。戸惑い続けていたヒュウガは、思わずその疑問を口にせずにはいられなかった。

「どうして……」

「ん？」

「どうしてそんなに、親身なのさ？」

仮にも危ない集団に狙われている依頼者の、よくわからないおかしな「空白」。そんな与太話にどうしてこの美形は、笑って手伝う、と言ってくれるのだろう。

僕は……と、ヒュウガは項垂れてしまった。

「この『空白』って……僕も確かに、意味がわからなくて困ってた。できれば原因を知りたいし、正せるものなら正したい……けど」

それはつまり、常識人であるヒュウガの、非常識な状態への不安。けれど今この危険な状況で、まだ追求をしたがっているのは、ヒュウガというよりレキだった。

「でも……君が言うほど、差し迫る悪いもののだとは、今も正直思えなくて」

そう。そこまで本気で、なるべく早く取り除かなければいけない不具合であるとは、誰も——ヒュウガ本人ですら思っていなかった。

任せると言いつつ、引き止めたのはレキだ。その理由がヒュウガにはわからなかった。

珍しく黙り込み、レキが少しは真面目な顔をして、腕を組んで考え込んだ。

「……そーだなー……どう言ったらいいのかな……」

ヒュウガの隣に同じように座ると、いつもの軽口で——続いて、とんでもないことを口にしていた。

「カシュウの当主としてでも、いち仕事人としてでもなく……オレ個人が、ヒュウガを帰したくない、なんて言ったら？」

ぶふおっつ！

渡された緑茶を飲んで、不安を紛らわせようとしたヒュウガは吹き出しかけた。

「——大丈夫か？」

げほげほむせるヒュウガの、背を叩こうとするレキに、ずざざざ！ とヒュウガは慌てて距離をとった。

「きっ、君ねっ、いくら男同士だからって、こーいう状況でそーいう冗談言うのは、時と場合を考えてほしいよ！」

「あー、そっか。今この館にいるのって、オレとヒュウガの二人だけなんだよな？」

しかも、狭いお部屋で二人っきりだな♪ と。ヒュウガには死刑宣告にしか聞こえないことを、実に楽しそうにレキは言う。

「何言ってるんだよ、男同士で！」

「えー。ヒュウガ、男はキライ？」

「嫌いとか好きとかそーいう問題じゃない！ そんな気持ち悪い話自体、僕はしたくない！ レキの嗜好は勝手だけど僕まで巻き込まないでほしい！」

「.....おまえ、頭固いな～」

本日何度目かのその台詞。ヒュウガは実に不本意そうな目でレキを見た。

言った本人は何故か上機嫌で、それが尚更腹の立つヒュウガだった。

「それじゃ、人間として言い直すか。オレのことはキライ？ ヒュウガ」

「.....ってっ.....！」

その言葉には、いったいどんな意味が含まれていたのか。考えたくもないヒュウガは即答だった。

「僕はヘンタイは御免だ！」

「.....だよな。きくまでもなかったよな」

不思議とレキは、その回答を、とても優しい表情で聞いていたようだった。

「.....真面目な話。オレが何で——おまえを引き止めてるのか、ってことだけど」

「——」

先程までとのギャップに、思わずヒュウガはゴクリと息をのんだ。

「おまえ.....みえてたんだろ？ 昨日、あの部屋で.....おまえ自身の『流れ』が」

「——.....え？」

「もちろん、オレみたいに情報を拾えるわけではないにしても.....普通は光の道それ自体、おまえやオレの心の筋は、部外者にはみえるはずのないものなんだぜ」

「キレイ、と、あの時、暗闇の中で口にした者。

その場にいたのは、ヒュウガしかいない。

そしてその声が、流れをみて聴覚の死んでいたはずの、レキにも届いているその事実は。

レキはそれ以上は何も言わずに、さっさと布団に入った。放心するヒュウガを置いて、すやすや気持ち良さそうに寝入ってしまった。

……結局、どういうことだよ、と詳細を尋ねることもできず。ヒュウガはしばらくレキの寝顔を眺めていたが、さすがに飽きて、借りっ放しの居室に帰っていったのだった。

*

祖父は、言った。φ家の力は決して、汎用性も高くなく、絶対的なものでもない。それでも血筋を絶やしてはならない。φ家以外の家にも奪われてはならない。顔を合わせれば、そんなことしか会話のない祖父。あの祖父には後継ぎであれば、別に誰でも良かったのだろう。

ただ、φ家の後継ぎとなる者に、消えない呪いを残していこうとただけだろう。その効果は靨面だった。さすがはφ家の直系。今もその呪いは、父とヒュウガに根付いているのだから。

「……うわぁ……」

レキとの約束通り、昼前に例の暗室、「陰」の部屋に再びヒュウガが顔を出すと。

「やっと来たな。こっちはもう準備万端、整ってるぜ」

そこで待っていたのは、またも悪趣味に女装したレキ……ではなさそうだった。

「それって……式服か何か？」

「そーだな。いわゆる祭儀衣の類だ。一人で着るのは時間かかったけど、ま、コンディションとしては悪くないぜ」

何かの力を伝える名家で、その力を最も効率良く引き出す正装。陰陽師や巫女さんみたい、とヒュウガは漠然と思ったが、とてつもない美形のレキが切ると箔が違う。

そんな正装で暗く広い、床の幾何学模様以外何もない白い部屋に立つ美形の青年は、文句なく神々しかった。

——こんな格好が正装なんだったら……。

普段の服装も、美しさを追求して当然かな、と。黒Tシャツに黒ジーンズと、いつも地味なヒュウガが思わず考えてしまうほど、レキはやはり美形だった。

「始めるぜ。次に明かりがつくまでは、何が起こってもそこから動くなよ」

「.....わかった」

レキは別に、軽い雰囲気はそこまで変わっていない。今はあえてマジメな声色で告げたいらしい。

明かりが落ちる。闇の中に再び幾本もの、光の道筋が浮かび上がった。

ˆTURN OVER MAX 15 YEARS、

.....それでは足りない、と。彼は無意識に呟いていた。

レキの命一杯の、情報化可能な期間を設定しても、残念ながらヒュウガの生まれた年には後一年及ばない。

前は十年、今日は式服を使って十五年。発端を辿るレキの健闘は続く。

何故か今日も、ヒュウガにはそうしたレキの心が届く。

——.....考えたくもねーけど.....やっぱり事は、あいつが生まれた時からだっただけか.....。

それは、流れがみえるレキだからというだけではなく。ヒュウガの話を聴いていった中で、彼なりに見えてきた一つの真相だった。

人がいない所でだけ起こる意識の空白。

空白の間もヒュウガとして活動していること。

部外者に力を奪われんとする血筋への拘り。

ˆTURN OVER MAX 20 YEARS、

あっさりレキは、「一生懸命になれない」限界を突破し、己の生前までみえる禁じ手で設定を焼き直した。

——.....あ。やべー。

当然その禁じ手には仕掛けがあるが、対価の体調異常より恐ろしい危機が突然訪れた。

——コレ.....触ったら、こいつ.....。

やべえ。これ——死んじゃうわ、と、レキの不穏な心が届いた瞬間。

その流れを手繰り寄せた時点で、レキが気付くことはできたものの。

手放さなければこのまま死の支流に進む。しかし手放すこと自体ができない。

どこをみても、元の本流よりマシな流れは見当たらない。

幸いにも。レキ自身では止められない回転は、部外者の乱入で一時停止を余儀なくされた。

「……！！」

銃声そのものの不快な激音が、突然に場に響いていた。

レキに言われた通り息を潜めていたヒュウガは、否応なく我に返ることとなった。

「あ……レキ！？」

明かりがつけられた室内で、目の前には血を流して、気を失ったレキの姿があった。

「おとっと？ ホールドアップよ、家出息子さん♪」

聞き覚えのある声が、開いた扉の向こうから響く。

「アリデア！？」

「ご要望の通り、お迎えに上がったけれど。と言っても……帰る先は私の家になるけど」

そして扉からは次々、いかにもトップシークレットといった男達が押し寄せる。

「どういうことだ！？ 何故彼を撃った！」

「だって、こうでもしないと貴方、私に同伴してはくれないでしょう？」

大丈夫よ、とミリタリースタイルの金髪の少女は、Uピンからこぼれた髪をかきあげ、倒れているレキを大きな碧い目で見やった。

「急所は外してあるわ。貴方も拘束されたわけではないようだしね」

じゃあ、仲良しよね？ とアリデアと呼ばれた少女は小悪魔のように笑い、ヒュウガを見つめた。

「悪いけど、彼に更に銃弾を叩きこまれたくなければ、私と一緒に来て。来てくれるならこの人のことは見逃してあげるから」

本当なら口封じしなきゃだけど、と気楽に口にする従妹に、ヒュウガは心の底からの嫌悪感を向ける。

「……わかったよ。絶対、レキに、これ以上手出しはしないでいてくれるなら」

この状況では、ヒザキも二人を助けに入ることはできないだろう。自分だけ逃げても、今度はその後にレキが消される。だからヒュウガがヒザキを呼ばなければ、おそらくヒザキは現れない。「呼べば現れる」、そういう契約なのだから。

——御身に危険が迫った際は、お呼び出しを。

彼は護衛についた当初からそうだった。

仮にヒュウガがそれを望むなら、自身が咎めを受けようと……ヒュウガの望む通りにする、と。

そうしてカシュウ家の館を出ることになったヒュウガは、車中ですぐに眠らされたのだった。

*

——φ家の血を絶やしてはならない。
——φ家以外にこの血を伝えてはならない。
——φ家にふさわしくない後継者には CEECE

……うるさいなあ、と。

夢でまで繰り返し呪いをかける祖父に、ヒュウガは心底、うんざりした気分だった。

ヒュウガの父と母は、共にφ家の者だった。

それでも特筆すべきは、二人はφ家同士という理由ではなく、純粋に惹かれ合い、自他共に祝福を受けて一緒になったことだろう。

父の妹は、たいそうブラコンだったという。彼女は父を奪った母を憎み、まるで母達に復讐できる強い伴侶を望んで、叔父と一緒にになったのかとさえ思ってしまう。

それでも母は復讐を受ける間もなく、ヒュウガの誕生の時にこの世を去ってしまった。

残された父は、ヒュウガを母の姉に委ねた。けれどその伯母もヒュウガが中学に入る頃に亡くなり、それからヒュウガは父の元に戻ってきた。けれど父は多忙で、ヒュウガの教育係は主に祖父だった。

そこから祖父が亡くなるまで、毎日あの言葉を聞かされる拷問に近い日々だった。

夢現の中、本当はとてもきつい性格の従妹の声が、不意に聞こえ始めた。

——ちょっと……コレ、どーいうこと!?

従妹はヒュウガとは違い、非常に愛想がいい。叔母は結局、叔父の非道さに舐まれていったらしいが、従妹は叔父受けは悪くなかった。

けれどその反動は、何処かには現れるもので。

——ねえ、ヒュウガ。私達一緒になったら、まずあのクソ蟲をぶち殺しましょうよ。

何だかんだで。アリデアを娶るしか道はない、とヒュウガも以前は割り切れていた。

怖気づいたのは、祖父が亡くなってからの叔父の豹変だ。このまま彼女と一緒になれば、後継者が生まれた時点で用済みになり、始末される未来がありありと感じられた。冗談だと思っていたアリデアの言葉の怖さも、そうしてやっと気が付いたのだ。

それでも、縁談を断っても殺され、頷いてもその内用済みになる。結局ヒュウガの運命はそういうことらしい。

大した力でもないのに、何故こんなことになってしまったのか……むしろレキ程特殊な力である方が、後継者の価値も跳ね上がるだろうに。

その発想に、自らぞくりとした。

もしも、ヒュウガが、生きなければ。助かるために自身の能力を行使すれば……。

あの、根は人の好きそうな青年を利用することくらい、簡単ではなかったのか、と……。

*

「——いい加減起きなさいよ、ヒュウガ！」

自分にはきつい性格をみせることを躊躇わない、従妹の声で目が覚めたヒュウガだった。

「……ん……」

打たれた葉の影響か、まだなかなか焦点が合わずに、視界がぼやける。

「声は聞こえてるでしょ。どういうことなのか、一から説明してもらおうからね」

恥ずかしながら、自分の服がいくらか乱れていることに気が付く。アリデアもよくやるなあ、と、自分より一つ年下の従妹に対して逆に關心するヒュウガだった。

「ちょっと、ヒュウガ？ 聞こえてるの？」

……そこで不意に、また襲い来たあの「空白」。いつもは後で気がつくのに、今日は起きる前に、しかも、人がいる所での自覚は初めてだった。

この後ヒュウガは、自分が何を話していたか全く覚えていない。アリデアは違和感はなかった様子で、気がつけば鉄格子の向こうで、短パンにパーカーというシンプルな部屋着で気難しげに雑誌を読んでいた。

……って、へ。ヒュウガの時間が止まる。

鉄……格子！？

「ってアリデア！ ここ、何なんだよ！？」

「はい？」

今更、何言ってるの。という顔で、ヒュウガの寝かされた北側にあるベッドと、アリデアのいる南側の机との間。部屋の中央が鉄格子で仕切られた二つの区画がある場所で、さも当然のように、檻の中の獲物をアリデアは歪んだ微笑みで見つめた。

「何もくそもないわよ。私の部屋だけど」

「君は鉄の檻が設置された部屋に毎日いて、何も疑問は浮かばないのか!？」

「やーねえ。普段は勿論、鉄格子はしまっていてあるわ。人の部屋を人外魔境みたいに言わないでくれる？」

でも、と愛しそうに、ヒュウガと自身の間にあるゴツイ鉄格子をさする。

「これは私と父様にしか解除できないようになってるから。要するに貴方は、一生そこで、私のペットになる運命なのよ」

ぞぞぞぞ、と鳥肌が立つ。

アリデアが本気であることは、長い付き合いなのでわかる。この部屋もダイナマイトでも使わない限り、物理的にも破壊不可能だろう。それくらい徹底した性格なのが、あの叔父とその娘なのだ。

——当然……そんなことしたら中にいる僕も、一緒に木っ端微塵だし……。

とほほ……と。どうしてこう、自分の周囲にはまっとうな人間がないのか、つくづくヒュウガは大きく肩を落とした。

「ところで……今日は何日？」

あれからどれくらい時間がたったのか。レキはどうなったのか、ヒュウガの脳裏に暗い影がさした。

「貴方がここに来て二日目よ。父様はずっと、貴方の処遇について伯父様と交渉中」

ずき、と胸が痛む。それは交渉などではなく、単純な脅迫だろう。

「そう言えば昨夜、身の程知らずにも、貴方を訪ねてきたバカがいたわね」

「——……え？」

フイ、と冷酷にヒュウガを見るアリデアと、ぽかんと呆気にとられるヒュウガ。

「まだ貴方の加療が終わってないから、それは完遂させてほしい、なんて。わざわざ人目のつかない深夜にやってきて、バカじゃないの？ って遠慮なく始末してあげようとしたら、誰か忍者みたいな人影に連れられて、急に消えていったわ」

——やっぱり、レキだ……！ しかも、ヒザキも？

訳のわからないヒュウガだったが、二人がまだ自分に関わろうとしていること。それは痛いほどにわかった。

そんな話は無理な相談で、全く先の希望は持てなかったが、純粹に嬉しい心は抑えることができなかった。

.....そんなヒュウガの顔を見て、アリデアが不快げに眉をひそめた。
何故わざわざ彼女が、レキ達の来訪をヒュウガに教えたのか——それにこの時点で思い至るのは、いくらアリデアという少女を知るヒュウガでも不可能だった。
「また今夜来るって、彼、言っていたわ」
「.....えっ？」
「余程、貴方にご執心なのね。父様が貴方の正体に気付く前に、取引してあげてもいいけど」
そうして再び、歪んだ微笑を口元にたたえる。

「ご執心」、「正体」、「取引」等、理解不能なキーワードにヒュウガは置き去りだ。なのにアリデアは突然、残酷な真実をつきつけたに等しい。
「使えない貴方の代わりに彼をくれるなら。貴方のことは、父様には黙っていてあげる」

.....何を、言っているんだろう、と。
アリデアの目に宿る狂気に近い光に、ヒュウガは二の句が告げなかった。
「貴方と彼.....あの何もない部屋でいったい何をしたの？　彼はどういう能力者？」
「え.....？」
「言いたくないの？　.....別にいいけど」
アリデアはそもそも、ヒュウガが全く置いてけぼりであること自体、気が付いていなかった。
わかっていたのは、この話をすればヒュウガは、必ず衝撃を受けることだけだ。

「何にせよ.....彼とは取引させてもらうわ。結果も教えてあげるから、楽しみにしてて」
「.....アリ.....デア？」
——わけが、わからなかった。
彼女の目に宿る狂気。何故かアリデアは、とても追い詰められている、とヒュウガは気がつくことになる。

アリデアにとってヒュウガは、無残な裏切りを彼女に行っていた。それは彼女の面子だけでなく、この先の立場も危うくするもので。
その起死回生の唯一の策が、「レキとの取引」だったのだ。

そろそろレキが来る頃だ、と出ていく彼女に対して。ヒュウガは最早、普通の声をかけることはできなかった。

.....。

.....。

.....その後、どれだけの時間が過ぎた頃だろうか。

おそらくアリデアが部屋を出てから、そう長い時間はたっていない。

色々考えてみても、ヒュウガには状況が全くわからなかった。

ただ、アリデアが何故かレキを狙っていることしかわからず.....呆気にとられたままのヒュウガの前に、意外な人物が現れていた。

——..... ああ.....。

.....そういう、こと。

こうしてこの場に現れるということは、この状況を招いた張本人だろう人物。

ヒュウガは何の感情も抱かずに、「彼女」を迎え入れたのだった。

*

ヒュウガに何が起きているか、気付けていないアリデアが向かった先は。

「取引.....って。何か、そんな風に言われると、照れるな？」

全く照れたような表情はなく、いつも通りの軽い口調で、レキはアリデアと対面していた。それを後に、「彼女」は聴くことになる。

「ふざけないで。別に貴方個人に興味があるわけでも何でもないわ。私にはただ、能力者の伴侶とその後継ぎが必要なだけよ」

そうなんだな~.....と。否定も肯定もせず話を聴くレキに、アリデアは苛立ちを隠さなかった。

一方。同時刻における、ヒュウガとその彼女.....おそらく全ての黒幕との会話は。

「そっか.....君だったんだ、全部」

「.....」

自嘲気味に呟くヒュウガに、彼女は哀しげなまま、物憂げに見つめてくるばかりだ。

「君なら確かに、僕が何処にいるか叔父さんに密告できて。今もこうして、この屋敷に現れられて.....僕の記憶に空白を作ったり.....僕をここから出すことだって、できるんだらうね」

「彼女」は知っていた。レキとアリデアの取引など、おそらく叶わないものであると。

とぼとぼ……という表現がぴったりの状態で、取引を拒否したレキと別れたアリデアが、自身の家へ力無く向かう。

——オレにはよくわかんねーけどさ。本当の敵はアンタもとっくにわかってるみたいなのに、何でまだそこに固執するんだ？

少女は、どれだけ強気に生きてきていても、その実たかだかまだ十五歳で。

唯一頼りにしていた相手は、少女を助けられないものだと思った。

「だってまさか……ヒュウガが——なんて、反則じゃない」

青年から何故か、別れ際にかけてられたコートの裾をまくる。全身の重みを感じて少女は一人で悪態をついた。

「そんなの私——……ヒュウガのことが好きだって、どうしようもないじゃないの」

何の力もなく、ただ一人走ってきた少女の気持ちなど、誰にもわかるはずがなかった。

「いいわよ……それなら、他の誰でもなく」

それなら私が、ヒュウガの血をもらえばいいんだ、と。

それが唯一、少女もヒュウガも、まだしも受け入れられそうな道。狂気は半ば冷めてきた目で、アリデアは哀しく、結論を出したのだった。

そして。部屋に戻ったアリデアを待ち受けていたものは。

「……そんな！　嘘でしょ！？」

ヒュウガが、いない。

鉄格子には何の異常もなく、中にいたはずのヒュウガだけが、忽然と消え去っていた。

「まさか、父様…！？」

自分がない間に…！？　それはまずい、と動揺した心で、アリデアは咄嗟に鉄格子を解除した。

「ちょっと、隠れてるんじゃないでしょうね、ヒュウガ……！」

慌てて部屋の北側に入り、やはりヒュウガの姿がないことを確認する。

……そんな、慌てた様子の子の少女の姿に。

フフ……と、妖しく微笑む一つの人影。

人影は、少女が父から飛び道具を与えられていると、隠し場所も含めて知っていた。

——パン、と。消音装置がついていたため、実際にはそんな音もしなかったのだが、……。確かにその不自然な銃声を、少女は聞いた気がした。

「……あ、……」

がくん、と膝から崩れ落ちて、意識を失う。己が背後から撃たれたという現実は、果たしてわかっていたかどうか。

「……ありがとう、アリデア？ あなたのプライバシーのおかげで、この部屋には監視カメラがなかったのよね」

くすくす……と、消音装置付の小さな拳銃を、冷たく手にして笑う人影。

「でもごめんなさい。私もさすがに、大切なヒュウガの命を狙っている人達には、手加減はできないの」

人影はまるで口裂け女のような、形容し難い顔つきで美しく微笑んだ。

「だって……ヒュウガは最初から、私の獲物なんだから」

その、セミロングの黒髪で微笑む女性は。

まぎれもなくヒュウガが、ずっと「ユウハ」と呼んでいた、黒髪の彼女だった。

＊

「……ふむ」

突発的な危機には、元々慣れっこな彼だったが。

「君は……いったい、何者だ？」

本日も義兄への連絡を終え、甥の身代金を用意させていた彼は、突然の闖入者に心底不可解な表情を向けた。

「あら。アナタがこの顔を見忘れたなんて、言わせませんわ……なんて」

何かの時代劇のような台詞。言った本人がくすくす、と不自然にうけている。

女性らしい仕草で笑うその姿に、彼は首を傾げるばかりだった。

「……確かに君は私の義姉……そして、甥によく似ているが。それに……」

そもそも、何の違和感も持たれず彼の部屋に侵入するなど、甥が持つ特殊能力でなければ有り得ない話だった。

「そうか……^{あに}義兄が、交渉を粘るわけだ」

そう言えば昨日から、娘の定時報告も的を射ないものだった。そこにも思い当たる。

「それで、私に何の用だ。わざわざ自分から正体を明かしてまで……ヒュウガ」

「そんなの、決まっているでしょう？」

まるでさも、慎ましげな女性のように映り、彼に銃口を向けている人影。

アナタを殺しに来てあげました、と。

彼の娘にも向けた、小さな拳銃。ぞっとするほど綺麗に笑うと、ヒュウガと呼ばれたその女性は口にした。

「後ね……私は、ユウハっていうんですよ。本当ならそんな名を、母がつけてくれるはずだったんだもの」

「——人格の解離か？ ……いや、違うな。どうやら君は、その能力でもって、強烈な自己暗示を行ったようだな」

「はい。こうでもしなければ、アナタの部下を欺いてここまで来られませんし、ヒュウガも騙してあげられなかったから」

「なるほど。つまり君は今まで——自他共に、君が男だと騙し続けてきたわけだ」

「暗示」。その地味でありながら強烈な介入能力こそ、φ家が代々継いできた力だ。
——こんな女性は、この世には存在しない。

その強いメッセージを、常に彼女は発し続けた。結果、誰一人として、彼女が存在すると気付くことはなかった.....彼女自身でさえも。

「初めからそうではあるまい。元は、義兄の仕事であろうが.....」

「途中からは、その必要もなくなりました。.....だってそれは、父だけでなく、ヒュウガの望みでもあったから」

催眠暗示というものは、いくらそれが強引な処置でも、暗示をかけられる者の心に余程反する場合に強制力を持つことはない。

家を継ぐ、その意志がヒュウガにとって、祖父の望みだけでなく自身の責任感でもあったように。

「そうしないと、きっと私、祖父に殺されてましたもの。φ家に相応しくない後継者.....主に女性、という意味ですけど。だって女は、φ家以外の血筋にも確実な子孫を与えられてしまうんですから.....そう、それを願ったアナタのように」

「.....」

彼は冷静に状況を判断する。

今のやりとりは、監視カメラに捉えられているはずだ。φ家の催眠暗示能力はあくまで、人間に対してのみ効果を発揮するもの。

それなのに今この部屋に、誰も駆けつける気配がないのはどういうことだろう？

「ヒュウガの正体をアナタが知れば.....当然、アナタは力づくで、ヒュウガを自分のものにしたでしょう？」

必然、その場合、アリデアも用済みとなる。直接彼の子がヒュウガの力を受け継ぐなら、むしろその方が彼には好都合だろう。

「.....おぞましい.....なんて、可哀想なアリデア」

そうして彼女は、彼に対して至近距離で拳銃をつきつけて言った。

「.....さようなら、叔父様」

そのまま泣き笑いのような笑顔で、引き金をひく。

パン、と。消音装置が付いているはずなのに、やはり小さな音がしていた。

彼はその部屋の床一面に、彼の肉片が飛び散る様までを、冷静に見つめていたのだった。

＊

——そんな白昼夢から、彼女はやがて、静かに目覚めた。

思えば、全ては当たり前のことだった。性別を偽る自分の違和感など、どんな時に生じていてもおかしくなかった。

男にしては高めな声と細い体。服を着替える時やトイレやお風呂に入る時。それらは大体一人の時のことなので、元々設定した「空白」で乗り切れれば良い。後の危険は、自分の姿を不意に見る時。

レキの部屋で過ごした間、一番助かっていたことは何だったのか。

小さな洗面所の鏡くらいしか、自分の姿を映すものはなかった。それでも一人で自分と向き合う時間が多くなり、結局違和感を誤魔化し切れなくなった。

そんな時には取って置きの応用、白昼夢。

違和感が蓄積して耐えられない時は、そのまま違和感を本来の姿に戻してやった。

……本当なら、存在しているはずの女性。

自分とは違う存在として、「ユウハ」を実現させてやること。

ギリギリの状況で、ヒュウガは自分と周囲を騙し続けていた。

だから、その女性と喋ることができるのはヒュウガだけで。女性の言うことはヒュウガがその時知っていることだけ。

それでも、気がついてしまえば何のことはなかった。

「レキは……気が付いてたのかな」

——オレ個人が、帰したくない。

彼は別にどちらでも、あれぐらいのことは言いそうだろう。それは大して重要でないように彼女には思われた。

「……ああ、でも……本当……」

——なんて、醜い、姿なんだろう。

そう感じるのが、祖父の呪いの賜物なのか、彼女にはわからなかった。

それでもその嫌悪を止められないなら……すべきことは決まっていた。

それなのに、いったいどうしたことであるのか。

彼女が留まり続けるその場所に、やがて彼が辿り着いていた。

夜の屋上は、はっきり言ってとても冷える。アリデアにコートを渡してしまったレキは、元々の薄着好きが災いし、ぶるぶる震えながらのご対面となった。

「.....って」

.....何してんのさ、君、と。

呆れた顔で呟くいつもの通りのヒュウガに、レキは改めて覚悟を決めた。

「おまえこそ何してんだよ。寒いだろ、ここ」

「.....別に、これといった用はないけど」

ヒュウガはレキの方をみずに、暗闇に目を向ける。

「ここなら暗くて広くて.....キレイなこれがみえるから.....いいな、って、思っただけ」

ヒュウガの足元からいくつかのびる、レキの今の目の色と同じ光の道筋。

何故かヒュウガも、ずっとみえていたもの。それが確かに彼らをここに導き、流れをつなげた運命の光だった。

「でもこれ、先細りするような線もあるよね。僕は、こういう暗い所でやっとみえるけど、レキはいつも、こんな光をみて生きてるんだ？」

「.....まーな。本気でなくても、普段も多少はみえてるしな」

ふーん、とヒュウガは、心ここにあらずの状態。

「.....良かった。.....元気そうだ、レキ」

館から連れていかれた時には、撃たれてしまっていたレキ。

それだけがおそらく、気になっていた。

ふわりと笑って、先細りの光を辿るように、ヒュウガは躊躇い無く屋上の外へと足を踏み出し.....

.....あれ？ と。

「.....レキ、今.....動けない、はずなのに」

変だなあ、と。最後の暗示の無効を知って、ヒュウガは腑抜けた声を出した。

屋上の端から飛ぼうとしたヒュウガを、すんでのところで手を掴んだレキが、ふわふわした頭のまま不思議だった。

「っ生憎、本気の時は耳も死んでるって前に言ったろ。φ家としてのヒュウガの声なんて、全然聞こえてねーよ.....っ」

見た目は女性のように細く、非力なはずのレキの声が厳しい。ヒュウガの体重は人並みにあるので、レキの肩が抜けていないだけでも奇跡かもしれない。

催眠暗示は、音を媒介とすることが多い。知らない間に相手に聞かせるのが彼女の特技で、確かに先程レキにかけてははずの暗示は、最初から回避対策がされていたようだった。

「……でも、今、君……僕と、喋ってるじゃん」

「それはおまえが、カシュウの人間になったからだろ。同じ流れの上で喋ってんだから、『ヒュウガ』の声なら、届くさ」

「……どういう意味？ と、尋ねる前に。」

自分の手を掴む手先から、つ……と伝ってきた赤いものに、ヒュウガは初めて顔を強張らせた。

「……レキ、傷が……！」

泣きそうな顔で見上げるヒュウガに、レキは相変わらず軽口を叩く。

「反省してんなら、さっさと、上がってこいよ。悪いけどオレ、箸より重いモンは持ったことなくて、人間引っ張りあげる力はねーのよ」

「……—」

それならここで、ヒュウガが上がりとうしないなら。いつかはレキも力尽き、手を離すのだろう。

「……君……そんなに我慢できる意思力、ない人じゃなかったっけ」

「仰る通り。だから早いとこ、上がってきてほしーんだけどさ」

「……きつい、よ。それは、さ」

ただ、申し訳ない思いでヒュウガは項垂れる。

「……レキが来てくれるまでは、頑張ったんだけど……顔を見たら、気が抜けちゃった。僕……多分、祖父の後催眠だと思うけど……こんな僕じゃ、生きてちゃいけないんだって、心から思うんだ。それでどうしても、力が入らないんだ……」

「……………」

レキも恨めしい話だろう。ここまで来ると、全ては「心」の問題となってくる。「激情」を持ってないレキには、たとえどういった状況であっても、限界がくれば諦めてしまうだけだろう。

「お願い、レキ……このままじゃ君、一緒に落ちちゃいそう……」

だから、手を、離してほしい。

既に答える余力も失いつつあるレキには、それは時間の問題だった。

そうして手を離すくらいなら、あるいは。一緒に落ちた方が、気持ちはましだろうか。

……そうして、ふっと笑っていたレキは。

限界が訪れる前に、自らの理性でもって、屋上の縁を掴むもう片方の手の力を緩め——

ヒュウガと一緒に、そのまま落下するかと思いきや。

気がつけば屋上の石畳の上で、レキがヒュウガに覆い被さるように座り込んでいた。

「.....あれ.....？」

「——ふう」

やれやれ、と。ヒュウガの額にじわりと光る、カシュウの家紋を間近で見つめていた。

「.....まだ、パスが生きてて助かったぜ」

その助け無しに、二人以上に同時に力を使うのは、レキの介入力では難しい。

「できれば自分で、上がってほしかったけど」

ギリギリまで待ってはみたものの、どうにも難しそうだった。そのためあっさり、方針を切り替えたらしいレキだった。

「.....」

ヒュウガは座り込んだまま、黙ってしまった。

「屋上から飛ばなかった」流れに、強引に持ち込まれた。それはわかったが、たまたまこの時点では飛んでいないだけで、引き戻された流れの後は、反動でヒュウガがまた飛ぶという可能性もあるはずだ。

.....先刻の状態ですら這い上がってくるほど、彼女が呪いを断ち切らない限りは。

「.....って！」

あまりにヒュウガが静かで、隙あり、とばかりレキは彼女を突然抱きしめていた。

「何するんだよ、このヘンタイ！！」

慌てたヒュウガが、必死に振りほどこうとするのもかまわず、

「.....あー.....あったかーい」

嬉しそうに呟く、毒気のない声。ぴたり、とヒュウガの抵抗が止まった。

「.....僕は、人間カイロですか」

「いーじゃ〜ん.....あったかいって」

.....こんな状況でも、レキは真面目に喜ぶことができない。ヒュウガを泣いて止めることも、へたりこむヒュウガに喝一つも入れられはしない。

「うん。ヒュウガが生きててあったかくて、良かった良かった」

そんな、そのままの心を口にするしか彼にはできない。先程はあんなに強く掴まれていた腕とは別物のように、今の抱擁は優しく柔らかかった。

そんな彼の代わりに、涙が溢れてきたのかもしれない。

尚更ヒュウガは顔を上げられず、いつしかレキの胸元をぎゅっと掴んでいた。

「……レキ……僕、さ……」

叔父さんと、アリデアを殺したんだ。

彼女がそれを口にする前に、屋上一杯に甲高い声が響いた。

「ちょっと！ ヒュウガから離れなさいよ、アンタ！」

鮮やかな飛び蹴りが決まる。器用にレキだけが吹っ飛んでいった。

「ヒュウガ、怪我ない！？ アイツに何か変なことされてない！？」

「う……うん？」

「そっか、良かった……でも顔色、真っ青よ？」

そこで乱入した少女は、着ていたコートをヒュウガの肩にかけた。

「何か悪い夢でも見たんじゃない？」

「悪い……夢？」

「そう、夢。お互い、悪い夢を見てたのよ」

……。真面目くさっている少女に違和感が半端なく、思わずヒュウガは苦笑した。

「……アリデアって、そんなに優しくったっけ」

むっ、と。少女が不服だと言わんばかりに、頬をふくらませた時だった。

……無情に、その銃声は響いていた。

——ずん、と。

その、大型獣を射止めることも可能である大口径からの衝撃を横殴りに受けて。少女の意識はあっさり刈り取られていった。

「——……！？」

少女の斜め前にいたヒュウガに、右背から上がる血煙が降りかかる。

何が起こったのか、呆然と入り口に目を向けると、見知った顔が猟銃を下ろした。

「……父、さん？」

その狙撃者は、衝撃で真っ白になっている子供に、声ならぬ声で告げた。

……ただ、行きなさい、と。

それだけを心から、呪いのように強く。

後に、少女の父についても、少女より先に同じ運命を辿っていたことが明らかとなる。彼女が叔父と従妹に見せてしまった、あの血まみれの白昼夢のように。

その後のことは覚えていない。

レキが自分を抱え、連れていこうとしたことや、いつの間にかその場にいたヒザキに、役立たず、と文句を言っていたこと。横たわるアリデアに心肺蘇生をしていた気もする。

——くそ、止まるな心臓！

自分が発した暗示と全く同じ言葉を、レキが口にすることが少しおかしかった。

そんなものは、ただの時間稼ぎだ。撃たれたことを帳消しにでもしなければ助けられないだろうし、父があれほど思いつめていた以上、アリデアが撃たれない道は有り得ないだろう。

きっと、終点に辿り着いた流れは、いくら彼らでも戻すことはできない。終点以外に先がなければ、逸らすこともできない。その限界を、何となく悟っていたヒュウガだった。

……たとえばその日。レキが防弾コートを着てきたという、ささやかな横道がそこになければ。

*

……許してくれ、と。それを言いたいのは自分の方だったのだと——あれから何度も、父の後ろ姿はヒュウガの夢に出てきた。

——僕が生まれなければ、こうはならなかった。母さんを死なせたのも僕で、φ家の行く末を狂わせたのも僕。僕が生まれなければ……。

父が、自分を大切に思ってくれていたことは、痛いくらいにわかっていた。

だから余計に、許せなかった。父から母を奪った自分。それなのに母の死に見合う価値のある、後継ぎではなかったことが。

自分が女性であると気付いてしまえば、その責め苦をも自覚することになる。

実際に実家での扱いも、父の懸念通りに、決して楽観できるものではなかっただろう。あの厳しく優しくった父は、娘の幸せを願う心と祖父の呪い……φ家の存続との狭間で、どれだけ苦しんでいたのだろう。

父の苦しみを思うだけでも。

自分がこのまま安穩と、生きていていいとはどうしても思えなかった。

同時に彼女は、普通に自分自身のこと大事だった。父のため全てに嘘をつき、笑顔で一番穩便な道を選ぶことも結局できなかった。

相手が従妹でも叔父でも同じ。好きでもない相手に対し、喜んで伴侶にする、と、どうしてもその嘘をつくことができなかった。

せめてどちらかに覚悟を決めれば。

父があの時取った行動も、もう少し違ったものになっていたのではないだろうか――

……無理に、従妹を娶ることはない、と。

そう言ってくれた時の父の硬く幸せそうな微笑みだけが、今の彼女の支えだった。

「おっはよー、ヒュウガ♪」

「……」

おはよ……と。仏頂面で俯いてドアから顔を出す彼女に、彼はめげずに笑顔を振りまく。

「……で、何の用」

「――？ 用なんてねーけど？」

がく、っと。あれから一週間、ほとんど引きこもり状態のヒュウガの元へ毎朝顔を出す彼に、彼女の方がめげそうだった。

もちろん色々、感謝はしている。行く当てのない自分を「まだ加療中だから」と、レキはカシュウ家に滞在させ、全然治せそうにないとか何とか言って、入院生活がそのまま続いているのだった。

「にしてもおまえ、頭固いなー。用がないと、会いに来ちゃいけないとか思ってねー？」

「……そーですよ。どーせ頭、固いですよ」

最早日常茶飯事となった、この手のやりとり。しかしレキは、こういった会話をする時は、何故かいつも嬉しそうにするのだった。

「おまえ頭固いから、頭固いっていけないことなんだ、とか、どーせ思ってんだろ？」

「……？」

凶星ではあったが、レキが何だか遠くを見るような目をしたものだから、気になってつい、顔を上げて目を合わせてしまった。

「固執するのは、独りじゃない、ってことじゃん。何であれしがみつける位置が、おまえにはあるってことで」

それもいーじゃん、などと、彼は嬉しそうに笑う。

たとえ、その立ち位置がいくつもあって、互いに矛盾するものだったとしても。その苦しみは絶え間なくあり、大事な人に大きな苦悩を持たせてしまうものでも。

——行きなさい。父は、彼女にそう言った。

慣習や常識という、あくまでお互いの立ち位置を守るための決まり事……本質的には感情的な拘りである、彼女達を縛ってきた「家」とは違って。

初めから立ち位置そのものを持たず、柔軟という名の孤独で、家の力を切り売りして生きてきた彼の下へ。

「オレ、効率悪くてしんどいこと、できねーからさ。何一つやりとげたことがないのは、そんなに褒められたことじゃないだろ？」

強い思い。そうした感情の力を借りられない彼は、そうするしかなかったのだろう。それでは何も得られない、とわかっていても。

レキは僅か十四歳で、通学を諦めたらしい。名家である特権が奪われないよう当主となってカシュウの家を仕切りながら、自分のことまでするのは無理だったのだ。ただただ仕事を受けるだけの、彼なりに最大に必死な生き様がそこにあった。

そうしてこの山奥の寂しい館で、彼は毎日を、「ただ生きて」きたのだろう。

母が亡くなった時も、その後に父が失踪した時も、彼は涙も恨み言も溢さなかった。彼の傍に長くいる婆やから、ヒュウガはそんな風に聞いていた。

それはどんな苦行……そして孤独なのだろう、と彼女は思う。

苦しい、とすら強くは実感できないことが、せめてもの救いなのか。

レキとヒザキの協力の理由を明かされた後。どうして自分は、カシュウの血など全くないのに、少しでも流れがみえるようになったのかを、ヒュウガはヒザキに尋ねていた。「簡単な話です。ヒュウガ様はレキから、力の一部を継承したのですよ」

曰く。心の欠落によって力を持ったレキと、更にそのレキの心を自分が奪ったことで、ヒュウガとレキはつながっているらしい。

「それがカシュウの継承の例外です。どの道、心に関する継承形式には変わりありません」

溜め息が出てしまう。レキがいつから、ヒュウガが女性と気付いたのかはわからないが……絶対あの柔軟な青年は、そんなのどっちでもいい、と思っているに違いないと。

「……納得いかない」

「——ん？」

「……レキは、頑張ってるじゃないか。……まだ何も選べず、留まり続けてる僕と違って」

葛藤の多い自分と、仕事だけをする最低効率で生きている彼。何でも選べて、未来に恵まれているのは自分の方なのだ。

「別に……一生迷ってても、いんじゃない？」

その彼の回答は、予想通りのものだったが。それではヒュウガは納得いかないのだ。

「……レキは、僕が……男と、女。どっちを頑張った方が、いいって思う？」

ヒュウガが未だに、留まり続けている疑問。

女性としての自分には嫌悪しかない。今まで男性として必死に生きてきた彼女にとって、ここで生き方を変えろと言われるのは、死刑宣告にも等しい。

「あー。女になれ、なんて言われたら、また死にたくなるって感じだもんな、おまえ」

理屈の上では、それが正しいと知っている。自分が特別、これまで男らしかったわけでもない。

それでもヒュウガのその抵抗感の強さは、彼女の流れにふれたレキが、おそらく最も理解していた。

ドアごしに真剣に見つめ合う二人だったが……どうやら、苦悩しているのはヒュウガだけのようだ。

「そーだなー。それでも、オレ個人としては」

それは、彼女にとっては、意外な答で。

レキはただ、何一つ飾らない、いつものあの顔で笑った。

「ヒュウガが女になってくれた方が、男としては嬉しいけどな」

……かぁっと。

みるみる頭に血がのぼっていくのが、ヒュウガは自分でわかった。

「——じゃ。また、食堂で」

レキも一応照れているのか、ぐるりと彼女の居室を後にしようとして……——

「……え？」

「……あ」

ひし、っと。立ち去ろうとするレキの背中を掴んでいる手に、レキは勿論——

何よりヒュウガ本人が、驚きの表情を隠せなかった。

「……なに？ ヒュウガ」

優しく、そして嬉し気な表情を隠せず、レキは静かにヒュウガに問いかけてくる。

「え、えっと……その、これは……」

何も答えることができず、かと言って手を離すこともできない。

そのヒュウガの様子に、焦らずレキは、彼女の言葉を待っている。

「あの……何て言うか。……男でもいい、とか言わないんだなって。ちょっとは君のこと、見直したって言うか」

ヘンタイっていうの、訂正しようかな、と……そもそもからして、その偏見はレキに惹かれ始めた彼女が自身を抑える言い訳に過ぎず、本当にヒュウガが「ヘンタイ嫌い」な人間ではない。女装をやめないレキがそれを察していたとは知る由もない。

それがまだ、今の彼女の限界だろうことは、レキは重々承知しているようだったが。
「そっか.....んじゃー.....ハグしていい？」

「へっ!？」

にっこり笑い、ヒュウガに振り返ろうとして。

そして、いつかの時にもよく似た、鮮やかな飛び蹴りを食らうことになると、彼は果たしてみえていたのかどうか。

「!?!？」

突然吹っ飛んでいったレキと、吹っ飛ばした張本人にヒュウガは目を白黒させる。

「おはようございます。今日からヒザキ師の下で、ヒュウガ様の護衛見習いとしてお世話になります、ライカと申します」

「へ？」

「元々ヒュウガ様お付きのメアリや他の者も、いずれ到着致しますわ。何が御用があれば、いつでもお呼び下さいませね」

その、丁寧かつ愛らしさミックス、かつ実は何か企んでいそうな小悪魔笑い。

ヒュウガは物凄い勢いで既視感を覚えた。思わず眩量を感じるほどに。

「アリデア! 君、どう見てもアリデア！」

「嫌ですわ、ヒュウガ様ったら。妙なことは仰らないで下さいまし？」

それでは、と一礼し、風のようにその場を去る。残ったのは遠方のレキの呻き声だけだった。

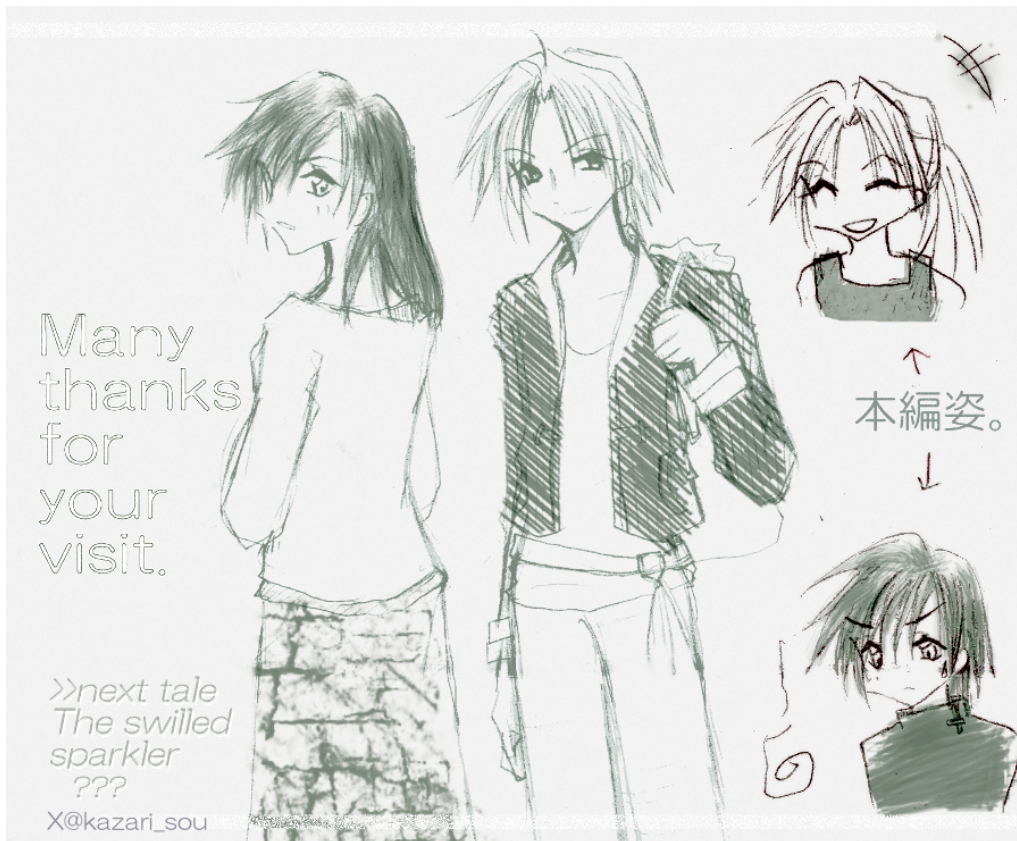
「.....やっべー.....楽しー.....」

そのレキのひしゃげた声に、ヒュウガの中で、何かが少しだけ吹っ切れたのか。

仕方ないなあ、などと眩きながら。

部屋から出て、彼を助け起こしに行く..... やっと、新しい朝の始まりだった。

=命の河の舟= 了



関連作：『モブの人生から逃げるために』

(<https://puboo.jp/book/135353>)

※本作が未来を含めてバッドエンドになった場合のお遊びメタ話です

■... by Birth シリーズ■

episode1: 『命の河の舟』

episode2: 『火の咲く家』

episode3: 題未定 (子世代)

※ episode1 以外未執筆で、今後書くとしてもおそらく episode2 までとなります
(続きを書いた際にはこのまま本作に追加完結する形で今後公開します)

エピソード1 <間>

運命という、「流れ」を司るカシュウ家。

「力」の名家の中でも異端な存在達が住む山奥の館の、二階の小さなエントランスで。暗い闇に向かって小さく白い、鳥のようなものを解き放った女性の姿が一つあった。

「.....——？」

それを不審げに、最上階の踊り場から、館の現当主たるレキは見下ろす。

女性の姿はすぐに消え、踊り場から飛び降りでもしない限り、追いかけるのは不可能だ、とすぐにレキにはわかった。

それはただ、この館に現在滞在している依頼者が無意識に、自らの終わりに近づく行動をとったこと。その危機をそうした形で知らせる幻であると、彼は悟る。

「.....まずいな」

思ったよりもずっと早く、タイムリミットが近付いている。

それに気付きながらも、どうしても今以上のペースで、依頼者のヒュウガ.....自らが女性であることを許せず、自分ごと消そうとしている重い者に踏み込むことは、なかなか難しい。

そんな自分に、改めてレキは、いつもの失望に微笑んでいた。

カシュウは古くは、河舟と書いたらしい。

運命という河を渡り、そこに有り得る好きな流れを見つけ、舟に乗せた者を導く神がかりな力。

しかしその舟守は代償に、あるものを失う。それが心の一部、ということなのだが.....。「それでもさ。も一ちょっと焦ろうぜ、オレ？」

レキは常に、何事にも強いやる気が持てない。「激情」を持たない彼は諦めが酷く良く、ちょっとやそっとの「死」の匂いにも、生業上慣れてしまっている。

だから本当は、生活の糧を得る仕事も常に面倒くさくて仕方ない。

今回はそれでも、珍しく楽しめている方なのだ。

「だってヒュウガ、あれ、みえてるんだぜ？ 見た目は地味だけど、ホントは可愛過ぎだろ、うん」

自分にないものを求めるのが、結局はヒトの性なのだろうか。よく怒りよく怒る、あれ、怒らせてばかりだ、の偏った大きな感情の持ち主は、レキにはとても刺激が強い。

見た目だけは華やかな、ただ柔軟に生きるレキにとって、彼女との日々は新鮮で仕方がない。

「やばいよ、タイプだよー。オレ様にしては最大の、毎日ココロうきうきですよー」

軽口を叩きながらも、それ以上何一つも、動く道を見出せない失望は消えない。

「このままだとヒュウガ……死ぬぜ、オレ」

自らを苛む心も、結局彼に強い思いなどは持たせず。

結局数日もしない内に、元々狙われた身のヒュウガは、無意識に自ら呼んだ迎えに連行されていった。

使者はかなり強引で、同じ場にいたレキは何と銃弾を撃ち込まれてしまった。

「悪いけど、彼に更に銃弾を叩きこまれたくなければ、私と一緒に来て」

そうしてヒュウガが連れて行かれる様子を、夢現にレキは耳にしていた。

幸いにもその時行っていた「入陰」の式の前に、違法の薬剤を内服していたおかげで、痛みはあまり強くは感じなかった。

「ヒュウガの……ばっかやろー……」

何だか幸いだらけだなあ、と、ドーピングのおかげで強められた怒りと共に……そこでやっと、レキは強く噛み締めていた。

——……その半刻後。

「……起きろ、このバカ息子」

「いでっ！」

止血の一作業を終えてぐったりと横になり、意識が落ちかけていた所へ、天誅のような横蹴りが突然にきた。

「いでーよ！ 何すんだよ、このバカ親父！」

薬剤の影響でまだ辛うじて、感情に力が残っていた。

あくまで今持っている分を大幅に強めただけなので、本気の怒りには到達し得ないが……それでも普段のレキから比べると、十分過ぎるほどに怒気を含んだ口調で言った。

「いくら、『最も出血も少ない害のない場所をキレイに貫通した』流れに変えたところで、傷口を放っておけば二次災害が起こる」

だからさっさと起きて手当てをしろ、と。

気休め程度の救急箱を持ってきた相手に、レキはじろり、と恨めしい視線を向けた。

「……アンタがみてくれれば、『運良く当たらなかった』流れもあるんじゃないの？」

「たわけ。あの状況で当たらずして彼らが、そしてヒュウガ様が納得する展開があるか」

ヒュウガの名前をきくと、レキは更に不快に、突然現れた相手を睨んで眉をひそめた。

「アンタさ……今はあいつの付き人やってんなら、何で助けに出なかったんだよ。そういう所、昔から変わってないよな、ホント」

クソ親父、と。ヒュウガの付き人として、この館にこっそり同伴したはずのヒザキ青年に向けて、あっさりと言うレキだった。

その、何処から見ても同年代の青年同士が、父、息子と呼び合う光景はかなり異様だった。

「……禁を破ったな、レキ。大事には至らず済んだようだが」

「しゃーねーだろ。あいつの流れを、本気で戻してやろうとすれば、生まれたくらいまで遡らなきゃ無理だったんだし」

しかしそれも、すんでの所で死への流れと、大惨事になりかけてしまった。

女性として生まれていれば、殺された。その流れを変えるため不自然な生を受けたヒュウガのことを考えれば、それは当然の結果でもある。今更ながらにレキは齒嚙みする。「どれだけ歪んでたって……その時には変えちゃいけない流れは、世の中にはあるもんだしな」

……何よりヒュウガ本人が、流れを戻すことを望まないだろうことにも、思いが至る。

「ヒュウガのやろー……」

ヒュウガが連行されていった陰の部屋の扉を眺めて、レキは大きなため息をついたのだった。

ひとまずヒザキの手配で町医者への往診を受けられ、レキの応急処置は終わった。

「しかしまさか、カシュウの力を売り物に使うとは、さぞかしご先祖様がお嘆きだろう」

「言っとけ。特技は活用するのが親に見捨てられた幼子の処世術だっつー」

「あの町医者、またか、という顔をしていたな。わざわざへっぽこが、危ない橋を渡ることもなかろうに」

ははは、コイツむかつくー、と遠慮なく睨む。身体能力でもカシュウの当主としても、父に大きく及ばないレキは不服しかない。

……ところで、と、レキはまた大きく溜め息をつく。

「今まで何やってたんだよ、クソ親父。一体何年、その姿に戻って生きてる？」

すると父は、十六歳で学生服を着ている自身を改めて見返していた。

「五年と少し、だな。ヒザキの名を受けて、ヒュウガ様のお付きを始める少し前からだ」

「呆れたぜ……よくそれだけ力が続くもんだ。切れた時のこととか考えないのかよ」

「一日の中で収支さえ合うなら、オマエにも不可能とは思わないがな。最も……」

歴代当主の中で、最もへっぽこなオマエには無理な相談だったか、と。

父は父で、いつも全く言動に遠慮が無い。
「そーですよー、バンピーなオレには縁のない世界ですよーだ。と言っても、女性に仕えるのだけが生き甲斐なんて変態紳士には、言われたくねーけどな？」
……。火花など鳴らしようのない「欠落した」二人だが、それでもお互い、呆れかえっていることは確かだった。

「で——何で、ヒュウガをわざわざ、うちに連れてきたんだ？ アンタならアレが、オレ程度にはどうしようもないってみえてただろ？」

——いや、と。ヒザキは十六歳の外見に不相応な落ち着きで、レキの所感を冷静に訂正する。

「オマエは勘違いしている。確かに、流れに介入する絶対力は私の方が桁が違うが、式を見出す細やかさはオマエの方が上だ」

それだけオマエの失った「激情」は、根が深い。レキがこれまでずっと抱えている業も含めて、無機質に口にする。

「オマエなら何か、違う流れを見出せないかと期待していたが……。それ以上に、今はヒュウガ様を匿う場所が必要だった」

時間がない、と。レキが感じていた漠然とした危機を、より裏付ける父の表情だった。

「……ヒュウガの、やつ」

先刻に手練り寄せた、死への流れ。そこにある確かな痛みを思い出した。

生まれながらに存在を否定されるのは、いったいどれだけ辛いことなのだろう。

たった三日寝食を共にしただけの相手に、オレも軽いよな、と苦笑するしかないレキだった。

とりあえずヒュウガを助けたいなあ、と。

子猫を拾う程度の強さでしか思えないレキだが、それは彼には、積極的に動けるレベルの思いでレキはほっとした。

ヒザキからヒュウガの行方の情報を得て、何はともあれ、まずは現場に行こう、と考えたレキだった。彼にとってはどんな所であれ、まずはその流れを把握するのが第一となる。

できればヒュウガが助かる流れ、みえればいいな。なんて気軽にやってはきたものの、一応、自分が「終点」に向かう危険な流れがないかは事前にみておく。レキはいつも「終点」だらけの中で生活しており、町医者縁が絶えないのもそのせいだ。

その日、いくつかは禁忌肢を踏めば成仏しそうな流れはあったものの、比較的行動は安全のようだった。

「……ま。親父がバックについてくれりゃ、一時的には、な」

彼の父親、三十歳は若作りのヒザキ青年は、その若作りを保つためにレキのように自由に力を使えない。その代わり昔から体術や隠密行動に長けており、レキが表に、ヒザキが裏にまわることで、ヒュウガ救出作戦の幕はとりあえず切って落とされたのだった。「と言っても……」

ヒュウガの叔父の屋敷まで来てみても、見事に何も、良い流れはありそうになかった。……唯一。正攻法にピンポンを押したレキを出迎えた少女——ヒュウガを攫った張本人、アリデアをまじまじとみるまでは。

「取引……って？」

それから一日後。

レキはアイスな即席コーヒーのストローをくわえながら、相変わらずの気楽な口調で、何だそりゃ？ と軽く問いかけた。

そこは街中のジャンクなフードのショップ。若者の溜まり場として違和感がなく、非道な父にも見つからず話ができそうな場所として、アリデアが指定してきた店だった。

一日前には、一度は追い返されたものの、何故か今日の夕方になって、少女からレキに「話がある」と、速達の手紙が入っていた。

どの道街にはまた降りるつもりだったので、快く誘いを受けたレキだった。

罨じゃないか、とは、誰しも普通思う所だ。レキ自身、昨日よりは「終点」につく流れが沢山あるな、程度には感じていた。

それでも今のところ、突破口としてはここ以外には見当たらない。黒の半袖お兄系ツナギに、気休めの防弾コートを羽織ると、指定のフードショップまで来たのだった。

そしてどうしてか、レキは——

アリデアから唐突に、ヒュウガを助けたいなら自分の許婚になれ、と持ちかけられる。

ゴメン、むり。即答したレキに、

「貴方、私のことバカにしてるの？ 言うておくけど、貴方に選択の権利なんてないのよ。辛うじて拒否権はなくはないけど、それは貴方——」

「ヒュウガを見殺しにすることと同義、って。あんたが言いたいのはそういうことだろ？」

「わかってるなら、どうして……！」

どうして、私の言うことを聞き入れないの、と。追い詰められた少女に、何の強い感情もない目で、あっさりレキは理由を告げる。

「だってさー。アンタ、オレのタイプじゃないんだもん」

「……！」

「悪いけど、タイプじゃない相手に欲情——いやいや、旦那さんになれるほど、遊びの多い精神構造は持ってねーんだわ。こればかりはうちの家系の呪いでさ、アンタには同情するけど、無理なもんは無理なんだよね」

ふー……と。困ったなあ、八方ふさがりだな、という感じで、レキ自身も溜め息をついた。

それでもアリデアとヒュウガの流れは、確かにつながっていた。彼女なら何かの条件が揃えば、ヒュウガを解放できるはずだと——それはレキにはみえていた。

「なーなー。……アンタさ、そんなに必死に突っ張ってて……しんどくねーの？」

だからその本質的な問いを、つい口にしてしまったレキだった。

その甲斐あってかなくか、結局は、進展も危険もないまま、場を後にしたのだが……。
「うーんー。まーずーいー……かなー……」

打つ手なし。に頭を悩ませ、館にも帰らず、街をフラフラしていたレキには、更に行動を起こせる強い見込みもとんとなかった。

「やばい……帰る以外のこと、思いつかぬー」

何となく嫌な予感がしたので、帰ることは必死に思い止まっていたレキに救いを差し伸べるように——

仕事のために持っているPHSに、ふと知らない番号から連絡がかかってきたのは、ヒュウガが暴走を始めた直後だった。

*

「こっち！　こっちが、父様の部屋！」

ダダダ……と、三人もの人間が全速力で廊下を走る音が、景気よく屋敷に響く。

「つか、ヒュウガに撃たれたって、マジ？」

「本当よ！　アンタが貸してくれたコートがなかったら、本気で死んでた！」

「自業自得だな。そんな玩具を持ったまま、ヒュウガ様を追い詰めるからだ」

うっさい！　と景気良くアリデアは、ヒザキに丸めたハンカチを投げつけていた。

ヒュウガを何と、自室内で檻に入れていたという恐るべきアリデアは、
「多分私が部屋を出る前、『ヒュウガは檻にいない』って暗示をかけられたんだと思う。帰ってから焦った私が格子を解除した時に、まんまと私の拳銃、持ち出しやがったのよ！」

その、少女の発言の怖さもさることながら。

「うーん……オレの目ってやっぱ、それなりに当たるんだなァー……」

アリデアと別れる直前、レキは、アリデアの流れに唐突な「終点」をみた。それがとても気になって、無理やり「寒いよな」とか何とか言って、自分の防弾コートを羽織らせたのだ。そしたら一気に「終点」が遠のいていった。

そして意識を取り戻したアリデアから、コートのポケットに入れていたレキの名刺の連絡先に通信が入ったのだ。

「あの子完全に、血迷ってる！ 弾は後一発だけど、ほっといたら何するかわかんない！」

それでも既に、アリデアが最初に撃たれて意識を失ってから、少なくとも半刻は経過していた。

たまたまレキがまだ近くにいたため、その程度の時間で合流できたものの、たとえばアリデアの父を葬るくらいなら、十分に余裕のある時間だった。

「それさ……アンタに言われたら、ほんとにヒュウガも報われないと思う」

「何よそれ！？ ったく、いつまでも銃弾の一発や二発、根にもってるんじゃないわよ！」

いや、それは無理だろ、とツッコミを返しつつ、先刻レキと別れた時にはあった彼女の暗い狂気は何処吹く風となっていた。

本来、アリデアはこういう少女なのだろう。育った環境が特殊過ぎて、歪んだ量で言えばむしろ救いがあるくらいだ。

ヒュウガから撃たれた、というショックで冷静になったのか、真っ当な判断でレキ達を呼んだようだった。

「別に、あのクソ蟲が撃たれて死ぬくらい、自業自得だけど…！」

ヒュウガがそれをする光景を思い浮かべると、今までのどんな運命の悪戯よりも、胸が悪くなったらしい。それで少女は観念したのだ。

「もういい！ 私、ヒュウガが女だろうと、そんなの関係ない！」

「……げげ」

「小さい頃からずっと、ヒュウガのことだけを追いかけてきたのよ！ アンタよりずっと年季が入ってるんだからね！」

それでもレキに助けを求めたあたり、少女の危機感の大きさを示してはいた。

レキはヒザキに目配せし、頷いたヒザキは姿を消した。

残った二人はようやく目的の部屋に着くと、……部屋の中にあった異様な光景に、しばし絶句することとなった。

「……ここで、ヒュウガが部屋に入ってくるだろ。でもそれは一瞬で、何もせずに出ていく。アンタの親父はその後、いったい誰と話をしているんだ？」

「知らないけど……多分この一瞬で、暗示をかけられたのよ。白昼夢みたいなものとか？ 見せられてるんじゃないかな」

監視カメラの映像を確認しつつ、ヒュウガの足取りを追うレキとアリデア。その映像には、ぶつぶつと独り言を喋りながら、床を見つめ続けるアリデアの父だけが存在していた。

「ったく。今映ってる他のカメラには、全く影も形もねーな」

あちこちの映像を探しながら、レキは大きな溜め息をついた。

「……私のことは撃ったのに、どうしてヒュウガ、父様のことは撃たなかったのかしら」

「んー……多分、優先順位の差じゃねえ？」

「え？」

レキは厳しい顔つきで映像の確認を続ける。

「弾はもう二発しか残ってなかったんだろ？ それなら誰にそれを使うかを、咄嗟に考えて決めた結果がそれなんだろーさ」

「……それって」

アリデアの顔が青ざめた。

「一発の使い道は、初めに決まっていたとしたらさ。もう一発は、より今後の動向が気になる相手に使いたかったんだろ」

あらかた全部の映像を探し終わると、レキは再び廊下へと出た。

「……まいったよな、こりゃ」

正直、手詰まりだ。ヒュウガが何処へ行ってしまったか、探す方法がない。

ぐずぐずしていれば、まず確実に、残りの一発は彼女自身に使われるだろう。その危うさは、初めて会った時から感じていたのだ。

自分を狙う叔父に居場所を知らせたのも、おそらくは彼女自身。ほぼ単身でカシユウの館を訪れたことに始まり、彼女は無意識に、自分を危機に陥れていた。

「……って……あれ？」

——その時、レキは。

「……そっか……クソ親父の居場所だって、フツーにわかったもんな……」

ヒュウガが来てから、自分の部屋にヒザキが潜伏していることは、すぐにわかった。

それは彼女が父の名を口にしていただけではなく、同じ力を持つ者同士の、つながりのためだ。

「——……ヒュウガ。おまえ、本当に……」

本当に、みえるようになってるんだな、と。

ひとまずはその、唯一の微弱な手がかりを辿って。監視カメラの記録済みの映像を再度必死にチェックするアリデアを置いて、レキは追跡に入っていった。

そこにあるのはただ、レキ自身の流れとつながる拙い光。

しかし確かに、それはレキとのつながりを求めて、自らレキの元まで届いた光の道だった。

「……オレを待ってるのか？ ヒュウガ」

屋上へ続く、細くて蛇のようにうねる光の道は、葛藤だらけらしいヒュウガの思いをレキに伝える。

「オレが来る流れの所に、わざわざおまえの流れ、残していくんだもんな」

うわ、はずかしーな、と。流れを追いながらレキは、一人で勝手に僅かに赤面する。

「ってーか……両想いになるの、早過ぎだろ……」

それはとっくに、彼だけが一方的に知っていた事実。

お互い、ただ生きるだけで必死だった身の上とはいえ、こうも早くレキの力が一部継承されてしまうことになるとは。このあまりの速さは、レキが一方的に惚れたから、のわけではなかった。

カシュウの力の継承の例外。

それはとても簡単なことで、血族以外には、力の持ち主が心を奪われた者に対して、その相手が心を受け取った時に成立するものなのだ。

「もっとこう、段階とか踏みたいよー、何か早過ぎて実感わかねーけど、オレだけ悶絶ってソレひでーよー？」

ヒュウガに流れがみえている。つまり、レキの想いは早々に受け取られ、だからカシュウの力を少しなりと継承してしまったヒュウガ。しかし……。

「ヒュウガは、認めてくれないだろーけど」

たはは、とレキは、今の自身の内なる危機感を強めるためにそれを確認する。

「うーん。せっかく両想いなのに、後少しでヒュウガ、下手したら飛んじゃうなー？」

階段をゆっくり昇りながら、急げよな、オレ。そう自嘲しつつ——レキにも心の準備は必要だった。

大切な相手の「終点」が迫る流れを、再び追うことへの覚悟が。

その終点は、ヒュウガのものだけでなかった。レキをここに呼んだアリデアのものが混じり、それはまだ回避できていない現実もレキはみえた。

「いやさ。ヒュウガとあいつなら、ヒュウガを選ぶけどさ」

ヒュウガの流れを辿るので精一杯のレキは、どうしてかまだ「終点」のあるアリアデアを、助ける流れまで探すことはできなかった。

「ヒュウガすら助けられなかったら、やだなー、もうほんとー」

そして結局、強い自己嫌悪の暗示に、自ら命を絶とうとしたヒュウガ。それをすんでの所で、何とか止められたのは良かったが。

レキが感じていた危機感と、ヒザキが感じていた危機感には、根本的な違いがあった。ヒザキは、ヒュウガを匿う場所が必要だ、と言った。それは実際に、叔父側の動きが激化しつつあったことに加えて、ヒュウガ自身の「自分は女性ではない」暗示が限界に来ていたこともある。

.....そんな状況に、一番追い詰められていたのは誰か。

元々、女として生まれたヒュウガを男だと偽り、今日まで隠し通して守ってきた存在。

やっと元凶が亡くなり、φ家の長い伝統が崩れるにしても、現当主として意志を通せば良い状態になったはずが.....更に危険な身内が存在したこと。もしも娘が女であることが明らかになった場合、まず間違いなく、娘は身内の毒牙にかかるだろうことを、彼は恐れた。

できるならば。そんな危険から遠ざけ、安息の思いを誰より必要としていたのは.....。

同じ年頃の子供を持つ身として。ヒザキの懸念は、見事に現実となったようだった。

「——父さ.....ん」

ふるえる声で、自分を見続ける娘に対して。

.....許してくれ、と。彼と、そのたった一人の娘の、すれ違いを象徴する言葉を残して。身内を殺しに来た男は独り、屋上から立ち去っていった。

*

少女が目を覚ました時には。そこは見知らぬ山小屋の、硬い木のベッドの上だった。

「.....？」

「目が覚めたかね、お嬢さん」

「.....あなたは？ ——っ」

声を出すと、脇腹に痛みが走った。何事か、と痛みの走った場所を見やると、羽織っていた見覚えのないコートの右側に、大きな焼け焦げがあった。何となくそれで、事の顛末は推測がついた。

さすがに衝撃は避けられなかったようで、肋骨のいくつかに負傷もあるようだった。

「……あれ？」

私、このコート、ずっと着てたっけ……？

必ず撃たれる運命だった少女を、横腹をかすった程度であれば、助けることができた防弾コート。その疑念は、持つてはいけないものとして、彼は少女に考える暇を与えなかった。

「まだあまり、動いちゃいかんよ。傷にさわる」

そのまま見覚えのない老人が、葉の入ったお茶を出してくれる。

「有難うございます……ところで、ここは？」

「カシュウの使用人見習専用の小屋じゃよ」

「使用人見習い……って!？」

ショッキングな単語に、一気に地が出た。

「ちょっと待て、アンタ何、誰!? ここは何処なの!? ヒュウガはどうしたの!？」

「ヒュウガ様は賓客として、本館におられる。お嬢さんにはまだ、聞いておかなければいけないことがあってな」

「な……!？」

そして老人は、少女がここに連れてこられた状況を説明する。

少女の人生の、大きな分岐。もう帰る所はない現実を、包み隠さず伝え切った。

少女は最初、僅かな痛みを浮かべてはいたものの、いつかこうなるだろう、という予感、元々あったのかもしれない。

そして老人から、ある依頼を少女は受けた。

「……いいわ。むしろ、望むところよ」

そうして、老人と少女の間の協定が成立する。

ほとんど即答で言い切った少女に、老人は一度だけ、痛ましいような視線を向けていたが。

「——それでさ。当然、悪い虫を追い払うことだって、任務の一つよね？」

不敵に笑う少女に対して、もちろん、と頷く、至って無責任な老人だった。

懸念はするが、嫌悪はしない。

そんな父の困った在り様に、レキはほとんど、自分の甘さに溜め息をついた。

「っつか。ヒュウガのことも、そのおっちゃんのことも。気付いてすぐ近くで控えてたなら、止めろよな？」

実は随分早くから、屋上のヒュウガを発見していた彼に対し、レキはぐちぐち、と悪態をつく。

「オマエが落ちた場合、引き上げるつもりはあったんじゃないのう」

それはレキが望んだからだ。ヒュウガを助ける、自分のフォローをしてほしい、と。

けれどヒュウガは、助けられることを望んでいなかった。ヒュウガの父の凶行も同様だ。そうした他者の意思に対して、彼自身は、嫌だから止めよう、という心を持ってない生き物なのだ。

「世の中、ままならないのう」

「白々しー。つつか何だ、そのわざとらしい老人口調」

「分相応という言葉を知っておるかな、レキ」

「.....はい、はい」

若返るように流れを戻し続けていたが、ある少女を助けるために力を使ったことで、反動が押し寄せてすっかり落ち着いてしまった彼。これ以上の追求は無駄だ、とレキは早々に諦めたのだった。

「で.....後何年くらいその老人姿でいるんだ、親父は」

「ふむ。少なくとも、五年は続くのではないかな」

「だっせー。絶対介護とかしてやらねーし」

となると問題は、これまで彼——老人になったヒザキが果たした役、ヒュウガの直属の護衛の問題がある。

そこで浮上した対策。彼が己の逆行の力を捨ててまで助けた少女の意向を、彼から伝えきくと、レキは苦笑い、少女との出会いをそこで思い返した。

「まあ、一個小隊についてきて一線に立って、人に銃弾叩き込むよーな女だもんな」

屋上で食らった、鮮やかな飛び蹴りも思い出した。助けるの早まったかなー、とレキは笑う。

どうやらこれからの生活は、騒がしくなりそうだ、という温かな予感を胸に。

ただ一つ——この自分が果たして、本当に何か、彼女の力になれるのか。

彼女を、そして、自分を止められるのだろうか。それだけは今も、そこかしこにみえ続けている、「終点」の存在を眺めながら。

- 堰 -

「それで……まだ、ヒュウガのことが許せないのか？ ……ユウハ」

その白昼夢は、彼女が館に再訪してから、何日目のことだっただろう。

「彼女」に会えるのは、いつも全て、白昼夢の中でだけなのだ。

「……あら。その答は、あなたには必要なかしら？」

「必要、必要。あんたがまたいつ、ヒュウガを殺しにかかるかわからないからさ」

やぁね、と女性は、嘘のないふわりとした微笑み。そうやって自分自身への殺意を否定する。

「それじゃまるで、ヒュウガを殺したがっているのは、私みたいじゃない？」

「——違うのか？」

「だって、そうでしょ？ ヒュウガは自分が女性……ユウハであることが許せないのよ。それなら、ヒュウガが私を殺したがってるんじゃない？」

女性の微笑みはとても美しい。自分の知る彼女と同じ顔であるとは、信じられないくらいだった。

「……そうかな。ヒュウガは、あんたのこと、好きなんじゃないかなって、オレは思うんだけど」

「……………」

女性はそこで、レキの金色の目に、哀しそうな顔で微笑んでいた。

「……そうね。私は、ヒュウガがきっと——理想としていた私なんだと思う」

でも、と。「夢」にしかない彼女は、悲しく微笑む。

「それは無理な話よ。……きつとこの先も、ヒュウガが私になれる日は来ない」

「……」

「あなたのせいじゃないのよ。それが元々、ヒュウガとユウハの定めだったんだから」

ヒュウガはきつとこの先も、これまで培った自分のまま、葛藤しながら生きていく。

そんな冷静な現実を、そのまま彼女は口にした。

「ユウハになりたい。そう願う自分が、ヒュウガは許せないのよ。……こんな無力な私に、憧れる私が」

それは生まれながらの、傷であり呪い。

彼のように、力に強制された心の欠落でもない。

彼女自身の魂の形が、元々そうであっただけの話だ。

「.....あんまり当たり前のこと、言ってわりーんだけどさ」

それでも彼は。目前で再び拳銃を持ち出した彼女に、諦めずに語りかける。

「人間って、変われるんだぜ？たとえ、変化を望んでなくたって、勝手に変わってくんだよ」

「.....——.....」

そうね.....と。全く信じていない綺麗な微笑みで、彼女は銃口を自身につきつけた。

「あなたがそれを言うのね.....レキ」

たとえ私が、ここで消えてしまったとしても。

泣いてもくれない優しいあなたが——と。

この白昼夢は、誰の望みだったのだろうか。

現実味のない銃声が響く。

碎け散る大切な人の肉片を見ても。

彼は結局、涙することはできなかった。

To be continued “episode 2” ???

Studio ***46

『... by birth』 (<https://puboo.jp/book/135553>)

... by birth

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
